

近代日本版画家名覧 (1900—1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、頻出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎（新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）	滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）
西山純子（千葉市美術館学芸員）	前澤朋美（信州新町美術館学芸員）
三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）	森 登（学藝書院）
樋口良一（版画堂）	
- 8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ <http://www.hanga-do.com/> でもご覧いただけます。

戦前に版画を制作した作家たち (7)

【く】

久木田重雄 (くきた・しげお)

札幌の北海道帝国大学の学生やその仲間は、同人誌『さとぼろ』(1925～1929)を創刊する。詩、短歌、版画を対象としていたが、第4巻1号から論説欄と絵画部が追加され、第4巻2号の投稿募集欄には絵画の選者として画家本間紹夫と共に久木田の名前が挙がっている。そのことから、元来、画家である久木田は『さとぼろ』への参加を機に版画を制作したものと考えられる。その『さとぼろ』第4巻1号〔通巻15号〕(1927.1)に《試作》(版種不明)と油絵《ハルビン小景》を発表。その後は版画のみとなり、第4巻2号〔通巻16号〕(1927.3)に《風景》、第4巻4号〔通巻18号〕(1927.6)に《北国晩春》、第20号(1928.1)に《雪景》、第21号(1928.2)に《北満の夏》、第23号(1928.5)に《春》、第24号(1928.6)に《静物》、第6巻1号(通巻25号)(1928.8)に《海村風景》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

草野 榮 (くさの・さかえ)

1929年1月の日本創作版画協会第9回展に木版画《信州風景》《海岸風景》、3月の日本水彩画会第16回展に版画《駿河台風景》、4月の第10回中央美術展《お茶の水風景》(版画か)がそれぞれ入選。翌1930年1月の『版画CLUB』(第2年第1号)の「CLUB紙上展」に、木版画《市ヶ谷風景》が第2席に選ばれ、作品図版とともに、草野氏「市ヶ谷風景」明快な作です。樹木の見方、家屋の千篇一律な表現に不明をみます」という選者・深澤索一の展評が掲載された。また、2月の日本水彩画会第17回展に木版画《郊外早春》が入選した。続く1931年は、5月の日本水彩画会第18回展に版画《神田川風景》、6月の新興版画第1回展に《聖橋》《風景》が入選。同展は8月に大分市でも開かれた。その後の活動は不明である。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所2002)／『日本水画会展覧会目録』／『版画CLUB』2-1(1930.1)、3-1(1931.8)／『郷土図画』1-5(1931.10)(三木)

草間京平(くさま・きょうへい) → 佐川義高(さがわ・よしたか)

楠見文雄 (くすみ・ふみお)

1936年8月8日・9日に西田武雄を招いて行われた京都エッチング協会主催のエッチング講習会と翌1937年7月(開催日は不明)の同講習会に参加する。【文献】『エッチング』47・58(樋口)

楠本 繁 (くすもと・しげる) 1900～1982

1900(明治33)年宮崎県に生まれる。1926年に東京美術学校西洋画科を卒業。1938年8月9日富山県立富山中学校で行われた講師西田武雄によるエッチング講習会に参加。講習会での制作作品が西田の主宰する日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第70号(1938.8)に掲載される。当時は富山県立高岡中学校(現・富山県立高岡高等学校)に教師として勤務。戦後は美術団体新構造社の委員を長年務める。1982(昭和57)年6月22

日逝去。【文献】『20世紀物故洋画家事典』(美術年鑑社1997)／『エッチング』69～71／『創作版画誌の系譜』(加治)

久世勇三 (くぜ・ゆうぞう) 1891?～没年不詳

1922年5月の『美術と文藝』第20号図案の巻(大阪柳屋画廊)の「新版画集」の頁に、久世の木版画《うつゝ》(一枚 2円20銭)が図版とともに掲載されている。現在確認できる久世の唯一の版画で、図版で見る限り、職人との協働作品と思われ、制作年は不詳である。作者の久世については不明な点も多いが、1891(明治24)年頃大阪に生まれたと推定される。1904年大阪府立天王寺中学に入学。同級生の青木大乘(精一郎)、宇野浩二、一級上の鍋井克之らと交友するも、中途退学。1912年に自宅(大阪市東区内久宝寺町2丁目)に「短檠社」を設け、3月から8月まで雑誌『短檠』(全6冊)を発行し、自身も「久世青楓」の名で絵や詩を発表。10月には斎藤與里、鍋井克之らと短檠社第1回展覧会を開催し、同展に《うたゝ寝》《遊女》を出品した。この展覧会には、油彩画・水彩画・パステルなどのほか、版画も並んだが、久世の出品作品の種別は不明である。1916年5月には自作の絵100点の入った『漫画と落語のどぼとけ』(発行所:霞亭会・霞亭会出版部)を自刊。渡辺霞亭が序話、鍋井克之が序文を寄せている。当時の住所は東京市街京橋区桶町15番地(霞亭会出版部と同番地)。その後、東京で出版社「大鐘閣」を経営し、雑誌『解放』(第一次1919.6～1923.9 52冊)の他、歴史、地理、文化、思想、文芸など多様な出版物を刊行する一方、1923年2月には宇野浩二の童話『赤い部屋』(天佑社)の装幀と挿絵を担当したが、同年9月の関東大震災に罹災して倒産したようである。翌1924年春に久世喜夫らと大阪・信濃橋に「マロニエ社」を設け、個人展覧会場の経営、美術的図書の出版を計画。1925年には小出楯重・中川紀元・鍋井克之らの美術雑誌『マロニエ』(1925.5～1926.5 12冊)を出版した。その後の活動は不明であるが、1930年代後半から戦後にかけては、兵庫県西宮市で出版業や書店を営んでいたという。【文献】北川久「雑誌「短檠」とその周辺」『美術館だより』27-1(1912.1)／『アトリエ』1988.11)／『美術新報』12-1(1912.1)／『アトリエ』1-3(1924.5)／明石利代『関西文壇の形成—明治・大正期の歌誌を中心に—』(前田書店出版部 1975)／『日本近代文学大事典』5(講談社 1977)(三木)

工藤勝雄 (くどう・かつお)

日本エッチング協会会員中村正雄(松尾鉱業K.K.の常務取締役)の招致により、1937年9月4・5日の両日、私立松尾鉱山小学校(岩手県)において講師西田武雄によりエッチング講習会が開催された。当時、工藤は同校の教師であったことから、講習会に参加したとみられる。その時の制作作品が西田主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第59号(1937.9)に掲載されている。【文献】女麻卓「受講の記」『エッチング』59／『創作版画誌の系譜』(加治)

工藤繁造 (くどう・しげぞう) 1900～1936

1900(明治33)年青森県西津軽郡柏村に生まれる。工藤については、『日本美術年鑑』(1937年版)の「物故作家及美術関係者」に記事があり、「日本美術院々友で、青森県立弘前工業学校の彫刻図画嘱託教師であつた工藤繁

造は病気の為三十七歳で夭折した。農家に生れ自由労働者をしながら彫刻に精進し、前田照雲〔木彫家 1879～1924〕に約一年間師事した外は独力で勉強し、大正十三〔1924〕年院展入選以来「村童」「雪路」「山鳩」「添乳」「俵結ぶ男」「牡鶏」等を殆ど毎年出品、昭和八〔1933〕年院友に推薦された異色ある作家であつた」と紹介されている。近年の資料では、院展の初入選は1923年の第10回展に出品した木彫《黄昏》が最初であつたようであるが、院展のほか、1929年から1931年の国際美術協会内国展（第1回～4回展、第2回展で協会賞受賞）、1930年の第2回聖徳太子奉賛美術展、1931年の第1回東奥美術社展（青森、審査員）などにも木彫を出品した。版画は、1929年1月の日本創作版画協会第9回展に木版画《娘》が入選している。1936（昭和11）年3月28日逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和12年版（美術研究所1937）／『青森県出身在住美術家工人等名簿』（弘前市立博物館1983）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所2006）（三木）

工藤信太郎（くどう・しんたろう） 1895～1953

1895（明治28）年青森県に生まれる。1914年の巽画会第14回展に油彩画4点を出品したうち《M子の肖像》は第3等賞を受賞。翌1915年には草土社第1回展や二科会第1回展に油彩画を出品。また、1923年から円鳥会の第1・2・4回展に、1928年から1932年にかけては春陽会第6・8・9・10回展に出品する。その後はパリに渡り、1937年の春に帰国。その秋に西田武雄の日本エッチング研究所において銅版画《ノートルダム》を試作（『研究所通信』『エッチング』62号 1937.12）。作品は研究所機関誌『エッチング』第63号（1938.1）に掲載された。その後、日本エッチング協会主催「第二回日本エッチング展覧会」（資生堂画廊 1941.5.15～5.18）に銅版画《ノートルダム》を出品。1953（昭和28）年逝去。【文献】『20世紀物故洋画家事典』（美術年鑑社1997）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所2006）／『エッチング』62・63・99・101（加治）

工藤貞四郎（くどう・ていしろう）

1932（昭和7）年11月に青森県師範学校で開催された「青師図画展」（4日～6日 同校）に版画《風景》（木版画か）を出品。当時、同校の3年生に在学中。【文献】江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』（津軽書房1979）（三木）

工藤幸夫（くどう・ゆきお）

1933年8月大分県師範学校において講師平塚運一による第2回版画講習会が行われ、主催した武藤完一はこの講習会を機にそれまで発行していた版画誌『彫りと摺り』（1931～1933）を『九州版画』（1933～1941）と改題。講習会参加者の作品をその『九州版画』第1号（1933.9）に掲載した。工藤の《春色風景》も掲載されていることから、講習会に参加したものと考えられる。後日、平塚は講習会の思い出と共に作品の感想を武藤完一に送り、工藤の作品については「相当面白い処があるが、桜か何かのやうなものは一不十分である。其他見処はあると思ふ」と評している。その後、第4号（1934.7）に《花二輪》、第6号（1935.1）に《乙亥の春》、第11号（1936.7）に表紙絵《茄子》と《少年》、第12号（1936.12）に《海

辺》、第15号（1937.7）には表紙絵として《海岸風景》を、第19号（1939.6）に《水辺》、第22号（1940.11）に《風景》と毎号のように作品を発表。当時、大分県南海部郡木立校に勤務。【文献】『九州版画』1・24／『創作版画誌の系譜』（加治）

国吉康雄（くによし・やすお） 1889～1953

1889（明治22）年9月1日岡山県岡山市に生まれる。1906年岡山県立工業高校を中退し、単身カナダ経由でアメリカへ渡る。ロサンジェルス・スクール・オブ・アート・アンド・デザイン、インディペンデント・スクール・オブ・アーツ（ニューヨーク州）、アート・ステューデントズ・リーグで美術を学んだ。アート・ステューデントズ・リーグ在学中の1916年から1918年にかけて44点のエッチングを制作。1918年には、アメリカにスタジオを持っていたジュール・パスキンと交友し、1925年と1928年の渡欧の際も親交を深めた。1922年ニューヨークのダニエル画廊で最初の個展を開催する。またこの年、ホイットニー美術館の前身であるホイットニー・スタジオ・クラブのリトグラフ工房で初のリトグラフを制作した。1928年渡欧時もリトグラフを盛んに制作。1929年開館したばかりのニューヨーク近代美術館が開催した「19人の現代アメリカ画家展」に選ばれて出品する。1930年より1940年代にかけて30数点のリトグラフを制作。1931年父親の病气見舞いのため帰国、岡山・明治製菓でリトグラフの個展を開催した。東京と大阪の三越でも個展を開催し、1932年アメリカへ戻る。1933年アート・ステューデントズ・リーグのインストラクターに就任し、歿するまで務めた。1936年ナショナリズムの台頭のなかで反戦、反ファシズムをモットーとするアメリカ美術家会議の第1回総会が開かれ、47人の全米執行委員のひとりとなり、さらに展覧会委員長に任命される。「戦争とファシズムに抗して一時事漫画・素描・版画の国際展」などを中心となって開催。1937年WPA（公共事業促進局）が合衆国市民のみが採用される外国人規定を採択し、国吉をはじめとするアジア系作家がFAP（連邦美術計画）から締め出される。1939年作家の権利を擁護する団体、アン・アメリカン・グループの会長となり1944年まで務める。1941年会長を務めるアメリカ在住の8人の日本人美術家の会がアメリカへの忠誠と日本の軍国主義への反対を表明する。1942年敵性外国人として夜間の外出が禁止され、ニューヨーク市外へ出る際の許可証が必要となる。1944年「民主主義のための日人芸術協議会」会長に選ばれる。1946年美術家の地位向上と経済的基盤の確立を目指す美術家組合の会長に選ばれる。1948年ホイットニー美術館で初めての現存作家による回顧展が開催される。1952年ヴェネチア・ビエンナーレにアメリカの代表作家として出品する。1953（昭和28）年5月14日ニューヨークで逝去。【文献】Richard A Davis, YASUO KUNIYOSHI The Complete Graphic Work, Alan Wofsy Fine Arts, San Francisco, 1991／『国吉康雄展図録』（東京国立近代美術館ほか2004）（滝沢）

梶原徳成（かきぎはら・とくなり）

長野県下水内郡の小学校教師を中心とする下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第1号（1934.9）に《庭》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

久保佐四郎 (くぼ・さしろう) 1872～1944

1872 (明治5) 年東京に生まれる。明治後期から昭和前期にかけて活躍した人形作家。1928 年平田郷陽らと白沢会を結成。分業を常としていた人形界において、すべての工程を一人で仕上げるという近代的な作家意識に目覚めた創作人形運動をおこす。1944 (昭和19) 年3月9日逝去。『御所人形』(だるまや書店 1922 3袋・木版29枚 巖谷小波題句付)、『諸国人形集』(1942 木版24枚 袋付)、『佐四郎人形集』(加藤版画研究所 刊年不明 木版24枚) などの刊行がある。【文献】『加藤版画研究所四十余年作品の歩み』リーフレット(加藤版画研究所 刊年不明) / 『山田書店古書目録』12 (1990.12) / 『かわほり堂 日本の古本屋目録』(2015.1) / 『デジタル版 日本人名大辞典+ Plus の解説』(2115.1) (樋口)

久保 哲 (くぼ・さとし)

紙版術研究所(はじめ謄写印刷研究所)を創設し、1923 (大正12) 年頃から「謄版印刷技術講習会」を開催、1925 年10月15日に技法書『紙版術講義』を発行。扉には「謄写版を簡単に合理的に紙版(カミパン)と呼びたい。総ての人に紙版の自覚と向上を促したい。紙版の藝術国を建設したい。」と記し、巻末では研究会「紙版同好会」への参加を呼びかけている。謄写版とは、発売元の堀井謄写堂の商品名であって、版式の特徴を端的に表していないと考えるほど、この版式に魅力を見いだした層が生まれてきていたのが、この時期であった。久保が製造・販売元が出した取り扱い説明書で提示する技術にとどまらず、独自の製版法を模索する様子は、大正期に謄写版をもとにオフセットの製版を試みていたという逸話にも窺われる。『紙版術講義』は、謄写版の取扱説明書以外ではもっとも早い時期に出版された技法書で、「特殊製版印刷」としてさまざまな図版製版に応用できる技法と作例を紹介している。【文献】久保哲『紙版術講義』(1925) / 草間京平『第二次孔貌通信』1 (孔貌通信の会 1970) (植野)

久保井市太郎 (くぼい・いちたろう)

木版彫師職人。1903 (明治36) 年頃に三宅克己と多色摺木版による水彩画複製(水彩画の木版色摺) 図版の試みを行ったのを手始めに、1905年には10月発行の『平旦』第2号に「木版彫刻」として名が示されている。『版画 CLUB』でも彫師としての活動が判り、1942年には版元中島重太郎の青果堂から『新編大東亜戦史ノ内 昭南抄』(佐藤春夫作・大内青圃画) を出版、1943年には『小川芋銭子賦彩版画集』、建艦献金全作品集『大東亜の花嫁』等の版画の彫を行っている。(岩切)

久保田清春 (くぼた・きよはる)

1928 (昭和3) 年の日本創作版画協会第8回展に木版画《風景》が初入選。翌1929年の第9回展にも木版画《或る停車場附近》が入選した。なお、大正から昭和にかけて作品を残している挿絵画家「久保田清春」と同一人の可能性もある。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) (三木)

久保田金僊 (くぼた・きんせん) 1875～1954

1875 (明治8) 年9月20日(1日説もあり) 京都に生まれる。本名吉太郎(のちに満昌)。父は米僊、兄は米齋、ともに日本画家。京都府画学校に学ぶが、1890年には父

と共に上京し東京に暮らす。日清、日露戦時は『国民新聞』従軍記者となる。1894 年日本青年絵画協会第3回絵画共進会に出品の《敦盛吹笛》が二等褒状を受けるなど絵画共進会で活躍。文展では1915年・1918年と入選。作画と共に、舞踊の舞台装置制作でも知られ、意匠デザインにも活動があつて松阪屋宣伝部長として1930年までその職にあつた。1954 (昭和29) 年10月9日東京都中野区で逝去。装幀や雑誌での挿絵、口絵などの仕事も多く、例えば坪内逍遙『長生新浦島』(実業之日本社 1922) の装幀・口絵が知られる。【文献】『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) (岩切)

久保田米僊 (くぼた・べいせん) 1852～1906

明治の代表的日本画家。1852 (嘉永5) 年2月25日京都に生れる。父は久保田音七。本名米吉(後に満寛)。字は「簡伯」。別号「塵芥頭陀」、「錦隣子」など。生来絵を描くのを好む。1867 (慶応3) 年鈴木百年のもとに入門。1873年21歳の時に第2回京都博覧会の席上揮毫者に出された。1878年9月幸野煤嶺、望月玉泉、巨勢小石らと画学校設立建議書を知事に提出し近代化をめざす。受け入れられて1880年6月京都府画学校が開設され出仕(咎めを受け一ヶ月で取り下げ)。1882年第1回内国絵画共進会出品の歴史画で銅賞及び画学校設立功労で絵事功労賞受賞。1889年パリ万国博覧会で金賞受賞し自費で渡仏。1890年1月徳富蘇峰招聘により図画主筆。この頃、芝在住で「司馬画塾」開設。1893年シカゴ万博出品の《鷲図》が受賞。国民新聞特派員として渡米。日清戦争時には国民新聞従軍記者として米齋(長男)・金僊(次男)の二人の息子と共に戦地に赴く。1897年石川県立工芸学校絵画教授となる。1900年患った眼病癒えず失明。その後は制作から遠ざかるも後進の指導に努め、1902年には『米僊画談』(松邑三松堂)を出版。他に著書は『米僊漫遊画乗』、『画法大意』(女学全書7編)、『閨閣世界博覧会美術品画譜』なども知られる。1906年(明治39)年5月19日逝去。文芸書の装幀絵・口絵(木版)、新聞、雑誌への挿絵も多く、時宜にかなった画や巧みな描写力で魅せる。肉筆作品にも優れると共に近代的挿絵画家としても先駆者であった。【文献】『明治日本画の鬼才 久保田米僊遺作展』(星野画廊 2004) (岩切)

久保田真行 (くぼた・まさゆき)

長野県下水内郡岡山(現在の飯山市)に生まれる。長野県師範学校二部1・2年に在学中、同校生徒による版画誌『樹氷』第2号(1940年版)に《風景》、第3号(1941年版)に《橋のある風景》を発表。1941年同校を卒業。1950年当時は長野市古牧小学校に勤務。【文献】『樹氷』2 / 『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950) (加治)

久保田行秀 (くぼた・ゆきひで)

長野県須坂で信濃創作版画研究会が発行した版画誌『櫟』第1輯(1933.8)に《新世界》を発表。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」(臥竜山風景版画集)』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

熊谷曇窈 (くまがい・がんよう)

洋画家宇治山哲平が昭和初期に出身地大分県日田市(現・日田市)で発行した版画誌『朴ノ木』第2号(1933.7)

に《五郎ヶ涼岩》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

熊谷景月（くまがい・けいげつ）

洋画家宇治山哲平が昭和初期に出身地大分県日田町（現・日田市）で発行した版画誌『朴ノ木』第1号（1933.4）に《松の峯》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

熊谷元一（くまがい・もといち） 1909～2010

1909（明治42）年7月12日長野県下伊那郡会地村（現・同郡阿智村）に生まれる。1929年飯田中学を卒業し、1930年に小野川小学校に勤める。この頃から童画を描きはじめ、童画家武井武雄の指導を受ける。武井との師弟関係は生涯続く。1932年には童画作品が『コドモノクニ』にはじめて掲載され、以後、幼年雑誌に継続的に投稿し、絵本も出版する。その間、写真家としても活躍し、1938年朝日新聞社より写真集『会地村』を出版。1955年には『一年生 ある小学校の記録』で第1回毎日写真賞を受賞。熊谷は故郷の学校教師を続けながら、童画を描き、子供の写真や故郷の風景を写真に撮ることを天職としていく。1966年に教師を定年退職。戦前戦後を通じて童画家、写真家として、写真集、絵本、エッセイ集などを刊行し、1988年出身地にふるさと童画写真館（現在は熊谷元一写真童画館と改称）を設立。1994年文部大臣より地域文化功労者として表彰され、『熊谷元一写真全集』（郷土出版社）で第48回毎日出版文化賞特別賞を受賞する。2010（平成23）年11月6日逝去。

版画関係では、1934（昭和9）年に武井武雄が全国の芸術家に呼びかけて始めた版画による年賀状交換会「版交の会」（第3回からは「榛の会」と名称変更）に初回から参加。戦時中は東京大空襲が予想される中、武井邸を取り壊し命令を受け「榛の会」の継続を熊谷に託したが、1945年4月13日の東京大空襲により、武井邸は全焼し、熊谷の自宅も焼失した。「榛の会」の存続も危ぶまれたが、第22回（1956）まで続いた。また、長野県須坂で信濃創作版画研究会が発行した版画誌『櫟』第5輯（1935.4）にも《賀状》を発表している。【文献】『須坂版画美術館収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』（須坂版画美術館 1999）／「熊谷元一年譜」『信州・昭和の原風景 熊谷元一白寿記念写真集』（一草舎出版 2008）／『創作版画誌の系譜』（加治）

熊谷守一（くまがい・もりかず） 1880～1977

1880（明治13）年4月2日岐阜県恵那郡付知町（現中津川市）に生まれる。父孫六郎は岐阜市で製糸工場を営み、岐阜市初代市長、後に衆議院議員となる。1894年岐阜尋常中学校に入学。1897年上京して芝の正則尋常中学に転校、更に1年足らずでやめ、慶応義塾中等部に通うも1学期で退学。画家を志し、1898年本郷の共立美術学館に通う。1900年東京美術学校西洋画科選科に入学。同期に青木繁がいた。1904年同校卒業。1905年農商務省樺太調査隊に参加し、冬季をのぞき約2年間樺太に滞在して動植物や風景などの記録資料を作成する。1908年第2回文展に《肖像》が初入選。翌1909年第3回文展に《蠟燭》を出品して褒状を受ける。1910年帰郷、5年ほど郷里の付知で林業の日雇い仕事に従事する。1915年再び上京し、第2回二科美術展覧会に油彩画を出品。1916年二科会会員に推され、1944年二科会解散まで出品を続けた。戦後は宮本三郎らと第二紀会を結成するが、1951年退会、その後は団体展から離れ無所属で制作を続

ける。3人の子どもを失いながら、自然や裸婦、身近な小動物や花などを描き続けた。文化勲章や叙勲などは辞退、「画壇の仙人」と称された。1977（昭和52）年8月1日逝去。洋画家熊谷樞（現豊島区立熊谷守一美術館館長）は次女。

守一の版画制作の全貌については、『熊谷守一生前全版画集』（岐阜新聞社 2007）に詳しい。それによると、戦前の版画として、まず岐阜県美術館が所蔵する3点の銅版画《自画像》《婦人像》《裸婦》の制作がある。天童市美術館の池田良平学芸員の調査では、守一のアトリエに銅版画のプレス機があった形跡はないことから、1929年開設の二科技塾（後に番衆技塾と改称）で10年間ほど講師をしていた頃に制作したのではないかと推測している。また西田武雄は『エッチング』第15号（1934.1）の『方寸展』（銀座・紀伊国屋画廊 1933.12.29～31）の記事のなかで、「この当時〔バーナード・リーチ渡来後）のものと思ふが私の手許に熊谷守一氏作の裸体（男）習作のエッチングがある。当時エッチングに手を染めた作家は相当にあったことと思ふが、プレス其他道具類不備は、やがて断念せしめられたものと思ふ」と記しており、岐阜県美術館が所蔵する3点の銅版画のほかに、《裸体（男）》の制作も伝えられるが、作品は未見。また展覧会出品記録として、日本エッチング作家協会主催の第2回日本エッチング展覧会（資生堂画廊 1941.5.15～5.18）に《裸婦》を出品。岐阜県美術館所蔵の《裸婦》と同一作品かどうかは確認できていない。その他、1943年に守一が下絵を描いた木版画《山百合花》（版画倶楽部刊行『詩と版画 軍艦献金作品集 大東亜の花ごよみ』第2集／佐藤一英詩 久保井市太郎彫、新井啓介摺 定価50銭、そのうち15銭を軍艦のために献金する趣旨）が知られる。戦後は、版画制作を画家と職人の「二人の勝手の仕事」と呼んで理解を示し、1962年以降に京都版画院、加藤版画研究所、一柿木版社（五百旗頭欣一彫摺）から多数の木版画（集）を刊行。1964年にはパリ個展の時にムルロ工房で刷られたリトグラフ《鬼百合に揚羽蝶》《桜》やギャラリウムカイから自身が石版あるいはジंक版に直接描きこんだリトグラフ作品、油彩画のタッチを再現するために重ね刷りした複製的なシルクスクリーンの作品、五百旗頭欣一『信濃追分』や堀口大学『ユモレスク』『夢のあとに』などに挿絵を描いた木版詩画集の刊行など合わせて130点余の制作がある。【文献】『エッチング』99／熊谷樞「熊谷守一もの語り年譜」『熊谷守一画文集 ひとりたのしむ』（求龍堂 1998）／『今純三・和次郎とエッチング作家協会』図録（渋谷区立松濤美術館 2001）／『熊谷守一 生前 全版画集』（岐阜新聞社 2007）（樋口）

熊崎幸太郎（くまさき・こうたろう）

青森の佐藤米次郎が夢人社から発行していた『趣味の蔵書票集』第4回（1939.8）に蔵書票《昇龍》《たつのおとしご》《回教寺院》を発表する。【文献】『緑の樹の下の夢 青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）（加治）

熊沢欽三（くまざわ・きんぞう）

慶応普通部在学中、1934年6月30日に行われた生徒のためのエッチング講習会に参加。制作作品が西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第21号（1934.7）に掲載される。【文献】『エッチング』21（加治）

熊田大三（くまだ・たいぞう）

新しいエッチング教育の発展のために、福島県の須賀川第一尋常高等小学校においてエッチング講習会（1937年4月24・25日 講師：西田武雄）が開催された。当時、同小学校に勤務していた熊田はこの講習会に参加し、制作した作品と小文「エッチング講習会雑感」を西田主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第55号（1937.5）に寄稿。【文献】『エッチング』55（加治）

久米宏一（くめ・こういち） 1918～1991

1918（大正7）年11月18日東京小石川に画家久米修二の長男として生まれる。1935年豊島師範学校を卒業し、滝野川第五小学校の教員となる。傍ら太平洋画会研究所に通う。またプロレタリア美術同盟解散後のサークルや研究会に参加する中で柳瀬正夢、松山文雄らを知る。1937年大田耕士、小野沢亘、松下井知夫らと西田武雄の日本エッチング研究所に通い、エッチングによる漫画を制作。同年10月25・26日には銀座の紀伊国屋画廊でエッチングによる漫画展を開催した。「1000人以上の観衆があった」と大田耕士が『エッチング』第61号（1937.11）の「雑感」で伝えている。同号には久米もエッチング制作の意義について「随感」を寄稿。1938年大田耕士、小野沢亘、松下井知夫らと根津（大田耕士自宅）に「東京漫画研究所」を設立して後進の漫画家育成にあたるとともに、同年6月に機関誌として漫画誌（あるいは絵本とも副題）『カリカレ』を創刊する（1941.6終刊まで35冊刊行）。1939年中国北部を旅して中国民衆の姿を『カリカレ』に寄せる。北京で発行の文学雑誌『燕京文学』に同人として中蘭英助らと参加。翌1940年日本軍部統制の漫画雑誌『北京漫画』（武徳報社）の創刊・編集にかかわる。同年華北交通勤務の高畑光子と結婚。1943年頃か、北京で平塚運一と出会い、木版画の手ほどきを受ける（平塚運一は1943年5月に北京国立芸術専科学校から版画指導のために招かれて北京に渡り、1944年3月頃まで中国に滞在した）。この頃の作品に、モデルが光子夫人と思われる木版画《[女性像]》がある。1943年日本版画奉公会会員。1944年中国で召集され、ソ連国境の警備に当たる。終戦後は捕虜としてシベリヤに抑留され、1949年12月の引き揚げ船で帰国。偶然に平塚運一と出会う、再び師事し、デッサンや木版画を学ぶ。1950年日本美術会主催の第3回アンデパンダン展（1950）に木版画《北京の街角》、第6回展（1953）に木版画《子供たち》、北京で開催の中国人民芸術家木刻展（1953.5.5～5.18）に木版画作品を出品。1955年「版の会」に加わり、小野忠重の指導を受ける。1965年いわさきちひろ、滝平二郎らと童画グループ「車」を結成、以降毎年「車」展に出品を続けた。1976年木版画の絵本『やまんば』『黒潮三郎』で第25回小学館絵画賞を受賞。絵本画家として歩み、木版による絵本の制作や児童書の挿絵などを描いた。1991（平成3）年5月1日逝去。【文献】『エッチング』60・61・66／『回想の久米宏——追悼画文集——』（「回想の久米宏」刊行会 1995）／田中益三『絵筆とペンと明日—小野沢亘と仲間たちの日本／中国』（せらび書房 2011）／南雲大悟『日本占領区における漫画雑誌『北京漫』について』『千葉大学大学院人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書』207（2009）（樋口）

桑田恵造（くめだ・けいぞう） 1910～1994

1910（明治43）年青森県弘前市に生まれる。本名久

米田恵造。1931年の日本版画協会第1回展に《雪ノ山》で入選、以後1932年の第2回展に《營門》《公園の一隅》を、1936年の第5回展に《雪霽》《検潮機のある風景》を、1939年の第8回展に《冬ノ窓カラ》《仙台街景》を入選させている。青森市公会堂で開催された東奥美術展にも版画を出品、第2回展（1932）で《公園の一隅》《営内》が、第8回展（1938）で《試作B》が入選している。1934年の河北美術展と日本水彩展でも入選を果たした。版画誌での活動は、『版芸術』第9号（全日本版画家年賀状百人集 1932.12）に賀状を1点掲載、『白と黒』第32号（郷土玩具創作版画集 1933.2）にも《弘前木馬》があるが、これは『版芸術』収録作と同図である。また下澤木鉢郎が弘前の自宅を「鏑刀社」として1933年2月に創刊した『版曹』（ばんそう）において黒滝俊雄とともに同人のひとりとなり、第1輯（《町角》《営門》《初冬》）と翌年1月に発行された第3輯（《雪景》）に作品を寄せている。『版曹』第1輯では同人の言葉として版画を制作する喜びを綴り、「世の人々よ版画をものし給へ。而してこの法悦を味ひ給へ」と熱く結んでいる。1994（平成6）年逝去。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』（青森県立郷土館 2001）／『東奥美術展の画家たち—青森県昭和前期の美術—』（青森県立郷土館＋東奥日報社 2005）／『創作版画誌の系譜』（西山）

雲井信男（くもい・のぶお）

アトリエ社主催の第15回誌上展覧会（山本鼎選）に《わがれ路》《U子像》2点が佳作入選。当時、小樽在住。【文献】『アトリエ』5-10（1938.10）（樋口）

公文菊仙（くもん・きくせん） 1873～1945

晩年は掛け幅の「坂本龍馬肖像」（立ち姿）を描く画家として知られた。『古裂会（第68回入札オークション）』（2014.9）掲載WD-050「公文菊仙 坂本龍馬画賛幅」の画歴に、「公文菊仙（明治六・1873～昭和二十・1945）は高知県生まれ。楠永直衛から西洋画を教えられ、後上京。坂本龍馬の銅像が高知に建てられた昭和三年（1928）頃から起こった龍馬人気に支えられ、坂本龍馬の肖像画を数多く描いた」と紹介されているのを探った。山田奈々子『木版口絵総覧』によれば「明治三十五年頃から『やまと新聞』に挿絵を描いた。富岡永洗系であるらしい」として、1903年から1912年にかけての、村上浪六著作の口絵の多くを担当していることが紹介されている。こうした口絵から受ける感じとして、描写力に優れ、洋画風を加味したモダンさがある。1906年の『女鑑』9月号（国光社）に挿絵と共に「絵画と好奇心」の一文が掲載されてもいる。後に『国民新聞』でも挿絵を描いていた気配である。【文献】『古裂会（第68回入札オークション）』カタログ（2014.9）／山田奈々子『木版口絵総覧』（文生書院 2005）（岩切）

倉田白羊（くらた・はくよう） 1881～1938

1881（明治14）年12月25日埼玉県北足立郡西堀村（現さいたま市）に生まれる。本名重吉。「白羊」後に「忘斎」とも号す。浅井忠の妻やすは倉田家の出自。画才に秀でた10歳年長の兄・弟次郎は浅井忠宅に居住しながら洋画を学び、明治美術会に出品して将来を嘱望されるが、1894年23歳で急逝した。13歳の重吉は、弟次郎の遺志を継いで浅井忠の門下生となる。同門に一つ年下の石井柏亭がおり、親交を結ぶ。1898年東京美術学校

西洋画科選科2年に入学。浅井教室に入るが、浅井の欧州留学で黒田教室に編入され、よそ者扱いされたという。1901年同校を卒業、県立前橋中学校利根分校（現沼田高校）の教員となる。この頃中村忠誠の養子となり、中村重吉の名で1902年の第1回太平洋画会展に油彩画《牧場》など6点を出品し、太平洋画会会員となる。1904年同校教員を辞職。中村姓から倉田姓に戻り、上京して牛込に「白羊洋画研究所」を開設、鶴田吾郎が最初の弟子となる。渡辺審也の後任として石井柏亭とともに中央新聞社に入社するが、一か月ほどで解雇となり、その後時事新報社に入社。カット画の木版彫りやスケッチ紀行、美術展評などを担当する。時事新報社に働きながら文展や太平洋画会展に出品。この頃石井柏亭を介して山本鼎を知り、石井柏亭、森田恒友、山本鼎の3人が創刊した同人誌『方寸』（1907.5～1911.3 全35冊）に第2巻第4号（1908.5）より同人として参加する。石版、ジंक版、木版による表紙絵、挿画、カットを制作、小説『石版屋の女房』や散文などを掲載するほか、同人8名による石版刷『方寸画曆』明治42年版・43年版に各2図を担当する。石井柏亭の洋行、森田恒友の帝国新聞入社による大阪移住などで、第5巻第3号（1911.7）の編集を担当するが、負債の整理や二人が去った痛手などから、同号（青木繁追悼の号）を以って廃刊となる。1922年山本鼎が設立した日本農民美術研究所の副所長兼教育部主任に懇請され、房州から信州上田に移り住む。山本鼎が唱導する児童自由画教育運動、農民美術運動にかかわりながら、信州の身近な風景を題材に、一貫して写実的な油彩画を描いた。1915年小杉未醒に誘われ再興日本美術院展に出品し洋画部同人となるが、1920年第7回院展出品を最後に小杉未醒、山本鼎らと同会を脱退して春陽会を設立、1937年第15回展まで出品を続けた。1938（昭和13）年11月29日信州上田にて逝去。

版画とのかかわりは『方寸』時代の一時期で、以降の制作は知られていない。『方寸』復刻版第5巻の小野忠重解説では、第5巻第1号（1911.1）の木版画《牛舎》は白羊の自刻で、「明治期において、倉田は山本〔鼎〕とともに、創作木版の貴重な作家であった」としながら、白羊の「版の絵の愛情は生涯を通したに違いないが、おそらく自刻の創作意欲は、ただ一つ《牛舎》にとどまったのであろう」と評す。白羊による洋画の技法書『最新洋画の手ほどき』（島田文盛館 1914）には、『方寸』紙上に使われた自他の木版、ジंक版の版木を使って刷られた図版〔小野忠重によればおそらく伊上凡骨によると思われる〕が多数使われている。晩年殆ど視力を失った白羊が自費出版した木版漢詩集『半人三字文』（1935 限50部 和装本）の彫摺は、白羊宅に住み込んで教えを受けたという中西義雄が担当。中西義雄は上田在住の版画家で、日本創作版画協会第8・9回展（1928・29）に出品歴を持ち、日本版画協会創立会員でもある。農民美術学校版画部講師などを務めた。【文献】小崎軍司『山本鼎・倉田白羊』（上田小県資料刊行会 1968）／『方寸』復刻版全五巻（三彩社 1973）／『倉田白羊展』図録（埼玉県立美術館・佐倉市立美術館 2004～2005）（樋口）

鞍谷誠也（くらたに・まさなり）

兵庫県で発行された西日本新版画制作普及協会の機関誌『西日本新版画』第1年2輯（1936.10）に《芝居スケッチより》、第2年2輯（1937.7）に《裸婦》、第3年2輯（1938.7）に《海辺の家》を発表する。【文献】『創作版画

誌の系譜』（加治）

倉西雅三（くらにし・まさみ）

大阪で発行された版画同人誌『黄楊』創刊号（1933.8）に《静物》《末吉橋風景》を発表。それ以前に俳句同人誌『ムサビ』第6巻1号（1933.1）に《初旅》を発表し、第8巻5号（1935.5）では版画により表紙絵《糸巻法螺貝》を担当している。倉西は俳句も嗜んでいたようで、高浜虚子の選による『ホトトギス雑詠選集』には、倉西の句「道しるべ多き嵯峨野の麦の秋」が夏の部として「麦」の項に取上げられている。【文献】高浜虚子編『ホトトギス雑詠選集 夏の部』（朝日新聞社 1987）／『創作版画誌の系譜』（加治）

栗岩賢治（くりいわ・けんじ）

長野県下水内郡の小学校教師を中心とする下水内郡手工研究会在が発行した版画誌『葵』第3号（1936.7）に《賀状》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

栗川国夫（くりかわ・くにお）

台湾省台南師範学校在学中、山本磯一教諭の指導によりエッチングの制作を始め、西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第15号（1934.1）に銅版画（題名不詳）を発表する。【文献】『エッチング』15（加治）

栗木幸次郎（くりき・こうじろう） 1907～1981

1907（明治40）年12月13日盛岡市志家町に生まれる。旧制盛岡中学校を3年で中退して1923年春上京、貧しい暮らしのなかで詩を作り、1925年2月に『日本詩人』に投稿した「色彩に呼吸する」が第二席となる。同じ頃恩地孝四郎が装幀した多田不二著『惱める森林』を印象に刻む。子供向けの漫画などで生計を立てながら同人誌に参加、『金蝙蝠』表紙の凸版代を節約するために木版画を試みる。1927年に木谷忠一郎詩集『北方の曲』（文武堂刊）、1928年に平澤貞二郎詩集『街の小民』（金蝙蝠社刊）、1929年に一瀬直行詩集『蜘蛛』（獅子発行所刊）の装幀・挿画を手がけ、いずれにも版画を用いる。『北方の曲』『街の小民』は木版と見られ、『蜘蛛』は「ダブルホワイト版」と記されている。この頃版画に熱中してシュールな作風のモノクローム作品を多く制作、1931年に自身の画集刊行を目的に「栗木幸次郎版画頒布会」を立ち上げる。当時の広告（たとえば詩誌『蠶（たてがみ）』6号（詩原始社 1932.2））を見る限り『蜘蛛』の「ダブルホワイト版」と同種の作が売られたと思われるが、会は失敗に終わったという。版画の制作はこの頃までと推定され、まもなくデザイン界に転身したが、盛岡では1928年10月の素顔社第2回展に『街の小民』から12点が展示され、少なからぬ反響を呼んだ。これは友人が栗木に断りなく『街の小民』をばらして出品したものと、翌年3月に開かれた素顔社主催創作版画展の発端ともなった。栗木の出品はないが、これが岩手県初の版画だけの展覧会であった。栗木自身も1932年10月の素顔社第8回展には版画4点（《無題》（一）（二）（三）（四））を出品している。栗木の作品は舞田文雄ら岩手県の版画家に影響を与え、また高村光太郎は栗木の版画に注目したひとりで『街の小民』に好評を寄せ、戦後まで長く記憶している。村野四郎『體操詩集』など優れた装幀を多

く残したほか広い交友でも知られ、1928年に土方定一らと主催した人形劇団「テアトル・クララ」、松本竣介ら画家との交流や共作も記憶される。戦後は盛岡に帰り、松本竣介の兄・佐藤彬の紹介で新岩手社（のちの岩手日報社）に入り、『東北文庫』や『北の文学』などの編集やデザインを手がけ、岩手の文学界復興に貢献、多くの新人を発掘した。1981（昭和56）年7月21日神奈川県藤沢市で逝去。【文献】細野金三『昭和前期岩手の美術』（岩手美術史の会 1979）／『火山弾』27（栗木幸次郎追悼号）（火山弾の会 1982）／『萩原吉二と創作版画展 岩手の創作版画とその時代』図録（岩手県立博物館 1996）／『本の装い』図録（岩手県立博物館 1999）／『岩手グラフィックデザインの流れ』図録（万鉄五郎記念美術館 2002）（西山）

栗栖啓人（くりす・ひろと）

長野県飯田市に生まれる。長野県師範学校専攻科に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』第2号（1940）2600年版に《機関庫附近》、《城山ツヅシ》を発表する。1940年同校を卒業。1950年当時は諏訪市城南小学校に勤務。【文献】『樹水』2／『卒業生名簿 昭和25年』（信州大学教育学部本校 1950）（加治）

栗田紗羊（くりた・しょうよう）

萩原井泉水が主宰する俳句雑誌『層雲』の第3巻第7号（層雲社 1913.9）に木版挿絵《新聞》を制作。【文献】寺口淳治・井上芳子「大正初期の雑誌における版表現—『月映』誕生の背景を探って—」『大正期美術展覧会の研究』（東京文化財研究所編 2006.3）（樋口）

栗田 周（くりた・しゅう）

1938（昭和13）年の造型版画協会第2回展に木版画《早春》《ふね》《工場内》《らんぷ》《あぢさゐ》の5点が初入選し、新版画家賞を受賞。恩地孝四郎は、「栗田周君は技も相当練られてあるものだが対象に引き廻される難点がある。そこを乗り越えるべきだ。その難の最も著しいのは「ふね」で最も少いのは「らんぷ」、「らんぷ」が一番強い」（『造型版画第二回展』『みづゑ』400）と評している。翌1939年の第3回展にも《暗室》《枯木立》《葱坊主風景》《苺・水差》を出品し、T氏奨励賞を受賞。当時の住所は大船。その後、1940年頃に逝去したのか、1941年4月の第5回展には遺作《葱畑》《海辺》の2点が並んでいる。【文献】『造型版画協会第二回展目録』／恩地孝四郎「造型版画第二回展」『みづゑ』400（1938.6）（三木）

栗田 雄（くりた・たけし／ゆう） 1895～1961

1895（明治28）年10月2日静岡県磐田郡掛塚町（現在の磐田市）に生まれる。油彩画家を志し、1916年の第3回院展で《砂丘》が初入選。翌年より日本美術院洋画部同人に学ぶという。1919年8月上京、1921年に第3回帝展で《陰鬱な日》が初入選。院展では1919年の第6回展、1920年の第7回展でも入選を果たすが、7回展後の洋画部同人脱会とともに離れ、春陽会が設立されてからは同会に出品、1923年の第1回展から毎年入選を続けた。創作版画家としても早くから制作を始め、1920年の日本創作版画協会第2回展に木版画《公園の樹々》《静けき街》が入選、以後毎年入選を続け、1922年の第4回展からは会員として出品、1927年の第7回展まで出品を続

けた。版画誌への参加は『版画』（旭正秀編）第1巻第3号（1922.4）に発表した《小駅》に始まり、『詩と版画』第1輯（1922.9）、2輯（1923.3）、9輯（1925.1）、『HANGA』第4輯（1924.12）ただし『詩と版画』9輯収録作品と同図への掲載がある。『詩と版画』第8輯の「作品印象語」では1924年10月に行われた「詩と版画社第1回版画展覧会」の講評に加わっている。1930年に渡欧、翌年帰国。1931年の日本版画協会設立時には会員として記録されるが、展覧会への出品はない。『詩と版画』第1輯に寄せた文章「断片」で「むしろディレクターとなるが故にという誇を持ち得べき純な製作欲のままの製作」を望むと語ったとおり、あくまでも軸足を油絵に置き、創作版画の制作は大正期が主と考えられる。昭和に入ってから油彩画に専念、春陽会を主な拠点に（1932年春陽会賞受賞、それにより無鑑査、1935年より会員）制作を続けた。1939年の第3回新文展、1940年の紀元二千六百年奉祝展にも出品がある。1961（昭和36）年1月5日東京都板橋区にて逝去。【文献】「新人月旦 栗田雄論」『美之国』4-8（1928.8）／『日本美術年鑑』昭和37年度版（東京国立文化財研究所 1963）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『版画堂』目録80（2008.9）／『創作版画誌の系譜』（西山）

栗原玉葉（くりはら・ぎょくよう） 1883～1922

1883（明治16）年4月10日長崎県東高来郡山田村に生まれる。本名綾子（文字とも）。大久保玉珉の指導を受け、1906年上京し小林富次郎商店運営の小林夜学校教員をしながら女子美術学校に学ぶ。1909年女子美術学校を卒業。その後、寺崎広業のもとに入門。1913年第7回文展に《さすらい》で初入選。翌年《幼なごち》で褒状、以降、文展での入選を重ねる。1919年には、師の広業が亡くなったことで、松岡映丘に師事する。1921年第3回帝展では《清姫物語》が入選。翌1922（大正11）年9月9日心臓病悪化のため東京で急逝。少女雑誌を始め、様々な雑誌などの口絵・挿絵、絵葉書絵なども手掛ける。木版画集『義士大観』（1920）では《瑤泉院の賢行》を描いた。【文献】『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）（岩切）

栗原清詩（くりはら・きよし）

1929（昭和4）年1月の日本創作版画協会第9回展に銅版画《飼葉》が入選。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）（三木）

栗原 信（くりはら・しん） 1894～1966

1894（明治27）年3月24日茨城県東茨木郡石崎村（現茨城町）に生まれる。本名信賢（のぶたか）。1912年茨城師範学校卒業。1916年二科展に初入選。1918年東京本郷区の小学校図画訓導となる。同年二科展に落選し、井伏鱒二、和田伝らと同雑誌『世紀』を発刊。一時期小説家を志す。1926年画業を再開し、太平洋画会や二科展に出品。1928年小学校訓導を辞し、フランスに留学、アカデミー・グランシヨミュールに在籍する。1931年帰国。二科展に滞伝作10点を出品して、昭和洋画奨励賞を受賞。1936年二科会会員となり、1944年二科会解散まで同会に出品を続ける。1939年従軍画家としてモンゴルへ、1940～41年陸軍報道班員としてマレーに従軍。1939年陸軍美術協会、1941年大日本航空美術協会の設立などに発起人として名を連ね、戦中の戦争美術展、従

軍画家展などの展覧会に出品する。戦後は二科会再建には加わらず、1947年熊谷守一、田村孝之介、宮本三郎らと第二紀会（1951年に二紀会と改称）創設に参加する。1950年新潟大学芸術学科洋画科教授に就任し後進を指導、日本美術家連盟理事などを務める。晩年まで二紀展に出品し続けた。1966（昭和41）年7月4日東京都で逝去。戦前の版画制作は、1926年に木版画《水郷》1点が知られる。戦後は《風景》（1953）、《榛名》（1953）などのリトグラフを制作。【文献】『日本美術年鑑』昭和42年版（東京国立文化財研究所1968）／『山田書店 版画と美術』目録22（1995.7）／滝沢恭司「小野忠重旧蔵近代日本版画コレクションについて」『町田市立国際版画美術館紀要』17（2013.9）／『版画堂』目録106（2014.12）（樋口）

栗原忠二（くりはら・ちゅうじ） 1886～1936

1886（明治19）年10月21日静岡県田方郡三島町に生まれる。1904年県立葦山中学校卒業。父親の反対で美術学校への進学を果せず、1905年中央大学に入学するが、1年半後に退学して、1907年東京美術学校西洋画科に入学する。ターナーに心酔し「栗原ターナー」と呼ばれる。1909年第12回白馬会展に油彩画《月島同校》が入選、東京朝日新聞で好評を得る。1912年3月同校卒業、4月に同校研究科に進み、同年10月に渡英。ロンドンでジョージ・クローゼンに注目され、レオナード・ヒルの愛顧を受ける。その後ウィリアム・ブランギンに師事する。1924年帰国後、中沢弘光、川島理一郎らが結成した白日会に参加。同年の第1回白日会展に水彩画を出品し、第6回展（1929.2）まで出品する。この間、1926年再度渡英。1927年英国風景画家レオナード・リッチモンドと二人展を開催する。同年11月に帰国。1929年2月第6回白日会展の出品を最後に岩井尊人と同会を退会。栗原、片多徳郎、北島浅一の3名が発起人となり、青山熊治、吉田久継らと共に同年2月「第一美術協会」を結成する。同年5月第1回第一美術協会展に出品。第8回展（1936.6）まで出品を続けた。1933年築地洋画研究所を設立して後進の育成にあたる。1936（昭和11）年11月12日東京で逝去。版画の制作は、ロンドン留学時代に漆原木虫と出会い、木版画《キューに近い鉄道橋》（漆原木虫摺 1916頃）と1916年6月ロンドンでの個展出品作でリーズ大学副総長ミヒヤエル・サドラーが購入したとされる水彩画《リッチモンド・ブリッジ》の複製版画（制作年不明、版種はリトグラフか）が知られる。西田武雄は『エッチング』第49号（1936.11）で「私のプレスは当時英国に居られた栗原氏を通じてブランギン氏の世話で、中古品を手にすることが出来たのである。同氏の築地画室でもエッチングを教へたいとの御相談もうけたことがある。それもはたし得ず突然氏の悲報に接し驚いて居る」と追悼。【文献】『栗原忠二展』図録（静岡県立美術館 1991）／『版画堂』目録66（2005.6）／『エッチング』49（樋口）

栗原兵太郎（くりはら・へいたろう）

明治の石版印刷業界誌『虹』第1巻6号（1908.7）に石版画《夏の海辺》、第1巻10号（1908.11）に石版画《長夜》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

栗山茂（くりやま・しげる） 1912～2010

1912（大正元）年11月18日静岡県静岡市鷹匠町に

生まれる。雑誌『若草』で竹久夢二の絵にふれて憧れ、同じ頃木版画を試作。のち青木四郎を介して知った浦田儀一の父（摺師）から版画の手ほどきを受ける。平塚運一や永瀬義郎の技法書にも学ぶ。1929年秋、小川龍彦、中村岳（仲蔵）、杉山正義、青木四郎とともに童土社結成（童土社は1949年に静岡県版画協会と改称、現在に至る）。同年10月童土社創作版画展第1回展開催（1936年10月の第8回展より童土社版画展と改称、1942年11月の第13回展まで開催）。1930年中学卒業記念に同人誌『艸笛』を創刊、友人とともに版画や童謡、詩を寄せる（同年8月の第3号まで刊行）。1930年末、それぞれ個々に版画誌を主催していた小川の『まるめろ』と中村の『有加利樹』に『艸笛』を統合、新たに『ゆうかり』を創刊（童土社発行 発行日は1931年1月）。『ゆうかり』は1935年8月の第30号まで続刊するが、そのうち第1～24、28、30号に参加した（19号と20号では別名「あんりーしんげり」も使用）。1932年より静岡市役所水道課に勤務。1934年機械刷に移行しつつあった『ゆうかり』と距離を置き、手摺版画に研究的な内容も合わせた『飛白』（ひはく）を創刊。近くに住んでいた式場隆三郎の協力も得て1936年8月の第1巻4・5・6号（合併号）まで4冊を刊行した。童土社展や『飛白』で恩地孝四郎や前川千帆、川上澄生、平塚運一ら中央で活躍する版画家に参加を呼びかけて積極的な交流を図り、1934年9月には飛白社と童土社の共催で城内東小学校において「平塚運一氏版画講習会」を実現させている。自身も静岡県内外の多くの版画誌に作品を寄せ、『有加利樹（再刊）』第1～3輯、『白と黒』第2・7～21・23・25・30・33号、『版芸術』第1・6・9号、『かけた壺』第15・16・23号（作者名「アンリ・シンゲル」）、『彫りと摺り』第5号、『九州版画』第3・4号（別名「あんりーしんげり」も使用）、『日本版画協会々報』第28号、『櫟』第8・9・11・13輯に掲載がある。公募展では日本版画協会に1932年の第2回展から、国画会に1933年の第8回展からほぼ毎年入選を続け、1936年には国画会第11回展に出品した《日本平A》《日本平B》《駿府城跡》で国画奨学賞を、日本版画協会第4回展に出品した《静物A》《静物B》《駿河城跡》で日本版画協会賞を受賞。1937年より日本版画協会会員。1937年から戦中にかけては「松永茂」と改名。1939年市役所を辞し、3月に満州へ渡る。東辺道開発株式会社や南満州鉄道株式会社に勤務。満州でも制作を続け、中川雄太郎を介して本土の版画展や版画誌に作品を寄せ、日本版画協会が企画した「新日本百景」頒布会にも1940年の《芦ノ湖初秋》で参加、また満州国美術展覧会にも出品、入選している。奉天で再会した松村松次郎に誘われ、大久保一らと美術グループ「青々会」に加入、1939・40年頃展覧会を開催。1943年頃から職務により制作が中断。1948年6月帰国、同年童土社を静岡県版画協会と改称して活動を再開。戦後は日本版画協会や国画会（1950年版画部会友、1958年会員）、静岡県版画協会を舞台に活躍、「ひも版画」や「紙版画」を考案するなど自由な発想で制作を続けた。2010（平成22）年9月9日静岡市で逝去。【文献】『第45回 記念版画集』（静岡県版画協会 1980）／『静岡の創作版画 昭和戦前・版画家たちの青春』図録（静岡県立美術館 1991）／『満州美術』年表（飯野正仁 1998.2）／『栗山茂版画展』図録（島田市博物館 2000）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前編』（東京文化財研究所 2006）／『創作版画誌の系譜』／『現代版画の視点：深澤幸雄の版画対談』（阿部出版 2013）（西山）

栗山彌生（くりやま・やよい） 1915～1953

1915（大正4）年静岡市に生れる。版画家栗山茂の妹。兄茂が近所の幼なじみと発行した版画誌『艸笛』第1号（1930.3）に《春》を発表。その後、静岡の版画仲間が立ち上げた童土社の同人となり、童土社第2回創作版画展覧会（1930.10.11～13 田中屋襪衣店）に《風景》《お人形》、第3回展覧会（1931.6.27～29 静岡市呉服町田中屋画廊）に《みろり》《海へ》《人形》2点《踊り》、第4回展覧会（1932.5.7～9 静岡市呉服町すみや楼上）に《少女》《春》を出品する。また、童土社が発行した版画誌『ゆうかり』第1号（1931.1）に《海へ》をはじめ、第2号（1931.3）に《みろり》、第3号（1931.5）に《おらんだ人形》、第4号（1931.8）に《人形》、第5・6号（1931.12）に《童女蹴鞠》を、以後第12号（1932.12）まで11号を除いて女性らしい題材の作品を発表。その間、東京の料治熊太が発行していた版画誌『白と黒』第19号（1931.11）に《空軍来》を出品する。1932年1月に上京し、一時初山滋に師事する。1953（昭和28）年2月17日逝去。【文献】『静岡の創作版画 昭和戦前・版画家たちの青春』（静岡県立美術館 1991）／『創作版画誌の系譜』（加治）

黒川 啓（くろかわ・けい）

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）3～4年に在学中、同校生徒による版画集『刀 再版』（1940～1941）に参加し、その第1号（1940）に《室内》、第3号（1941）に《雪の東海道》、第4号（1941）に《ほてい》、第5号（1941）に《自画像》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

黒木貞雄（くろき・さだお） 1909～1984

1909（明治42）年12月8日宮崎県延岡市港（東海）に生まれる。生後間もなく母を失い、15歳にて父を亡くす。1931年に宮崎県師範学校専科を卒業。教師の勧めで、画家を志し上京。川端画学校洋画科にて藤島武二の指導を受けるが、病気のため帰郷。闘病生活の中、版画を始める。1931年版画の初作品《舟》を西日本美術展覧会に出品し、入選。この頃、東京で小野忠重らが結成した新版画集団に加わり、集団の機関誌『新版画』第15号（1935.1）に《賀状》、第16号（1935.4）に《延岡風景》を発表する。それらの作品が平塚運一や恩地孝二郎に認められ、本格的に版画制作に入る。1935年10月には第4回日本版画協会展に《故郷の山》を出品し、初入選。1938年の第7回展では《青島》が版画道賞（日本版画書院提供）を受賞。1940年の第9回展に出品した《可愛岳風景》《岩戸神楽》《浜木綿の花咲く青島》により、紀元二千六百年記念大賞の1位なしの2位を受賞し、会員に推挙される。日本版画協会展に初入選した翌年の1936年には、第11回国画会展で木版画《むかばきの夕映》が初入選。1942年の同展第17回に《かんな》《浜ゆふ咲く島》で同人に推挙されるが、翌年同人制廃止となり、あらためて1952年の第26回展で新会友に推挙される。以後両展には継続して出品するが、戦後、海外で開かれる版画展に出品する機会が多くなったため、国画会は第52回展（1978）を最後に退会する。日本版画協会会員。国画会会員。日本美術家連盟会員。そのほか、1935年10月の第1回新興美術家協会展（東京府美術館）には木版画《ピロウ樹の森》を出品。また、大分の武藤完一が発行した版画誌『九州版画』第8号（1935.10）に《風景》を登

表。平塚から版画の手ほどきを受けた平塚一門の版画家たちによって結成されたきつつき会が刊行した『きつつき版画集』昭和17年版（1942.8）に《延岡風景》、昭和18年版（1943）には《ドクダミ》を発表する。常に郷里宮崎に愛情を注ぎ、浦々庵（ぼっぼあん）と号し、県内の風物や郷土芸能等を主要なテーマとして木版画の制作に力を注いだ。1957年には版画の創作発表並びに美術指導を通じて文化の向上に寄与した功績により第8回宮崎県文化賞を受賞。1984（昭和59）年2月23日宮崎県延岡市で前立腺癌のため逝去。大崩山の岩峰に旭が差し始める光景を描いた《寂光仙境》は延岡総合文化センター小ホールの緞帳となっており、晩年の代表作を偲ぶことができる。【文献】『黒木貞雄略歴と作品年譜』（黒木貞雄1978）／『日本美術年鑑』昭和60年版（東京文化財研究所 1987）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『日本版画協会史 1931-2012』（日本版画協会 2012）／『創作版画誌の系譜』（加治）

黒住不二子（くろずみ・ふじこ）

女子美術専門学校の日本画科で学び、その後文化学院専修科に入学。文化学院専修科は1933年4月から石版や肖像画等の講習会を始め、エッチングについては第1回を10月に、第2回を11月（『エッチング』13）にそれぞれ1週間、日本エッチング研究所の西田武雄を招いて開催した。在学中の黒住もその講習会に参加し、制作した作品は西田主宰の研究所機関誌『エッチング』第12号に掲載された。その後、第14号（1933.12）に銅版画《新聞》を、第15号（1934.1）に銅版画（題名不詳）を発表。【文献】『エッチング』12～15（1933.10～1934.1）（加治）

黒田清輝（くろだ・きよてる／せいき） 1866～1924

1866（慶応2）年6月29日島津藩士黒田清兼の長男として鹿児島で生まれる。幼名新太郎（後に清光、さらに清輝と改名）。1871（明治4）年伯父黒田清綱の養子となり上京する。養父清綱は戊辰戦争などの功により、維新後、東京府大参事、文部少輔、さらに元老院議員を歴任し、1887年には子爵を受爵。清輝は嫡男として恵まれた環境に育ち、10代には大学予備門をめざして英語を学び、1884年17歳の時、外国語学校フランス語科2年に編入学し、フランス語を学ぶ。1885年2月義兄橋口直右衛門（清綱の娘千賀の夫）のフランス公使館赴任に伴い、法学を学ぶため清輝も留学する。以後1893年に帰国する10年余をパリを中心に滞在するが、法律学校在学中の1886年2月、滞仏中の山本芳翠や藤雅三、美術商林忠正らのすすめで、画家になることを決意し、5月にフランス人画家ラファエル・コラン（Louis-Joseph-Raphael Collin 1850～1916）に入門する。コランへの入門は藤雅三がコランに入門する際通訳をつとめた縁によるものであった。10月には生涯の盟友となる久米桂一郎を知り、久米と共にアカデミー・コラロシーのコラン教室に通学、また久米と共同生活を始める。しかし、養父が画家への転向に反対したため、法学を学ぶ傍ら習学していたが、翌年8月法律学校を退学し、画業に専念する。コランの画風は穏和で印象派風の明るい外光表現とアカデミックで堅実な描写を取り入れたものであるが、コランから黒田へ伝えられた画風は、その後の日本の洋画界を一変させることになる。黒田が画家として飛躍するのは1890年頃からパリの近郊グレーに滞在し、下宿した農家の娘マ

リア・ビヨンをモデルとした《読書》(東京国立博物館蔵)が1891年のサロンに入選、《婦人図(厨房)》(東京芸術大学蔵)、《編物》や素描《編物する女》(素描)など、留学中の代表作が描かれる。グレーからパリに戻った1893年には《朝妝》(焼失)がソシエテ・ナショナル・デ・ヴォザールに入選し、7月に帰国する。同年秋には京都に遊び、そこで目にした風俗に魅力を感じ《舞妓》(東京国立博物館蔵)や未完の大作《昔語り》の着想を得る。1894年10月山本芳翠の画塾生巧館を譲り受け、久米と共に天真道場を開設し、後進の指導に当たる。パリで学んだ方法を取り入れ基礎である素描は、当時の写真や版画の模写からはじまる教育とはことなり、塑像(石膏像)、活人(裸体)をモデルにしたもので、素描につかう画材も鉛筆やコンテではなく、木炭を使用し、19世紀後半のアカデミズムの思想を反映した新しい視覚とそれを表現するための画材をもちこんだ。さらに、油彩表現においても、それまでの「道路山水」の名所絵的な風景画から自然の一角を明るい色彩と筆触をいかした外光描写で表現することに主眼をおいたものである。同年11月には日清戦争の従軍画家として参加している。黒田の作品が社会的に注目を浴びたのは、1895年4月京都で開催された第4回内国勸業博覧会に滞欧作《朝妝》を出品し、妙技二等賞を受けたのが、等身大の裸体画が風俗壊乱に当たるとして新聞の批判や官憲の取締を受けた裸体画事件によってであった。同年10月に開催された明治美術会第7回展に黒田は滞欧作21点を出品、久米や天真道場に学ぶ画家たちも出品したが、黒田たちの外光表現による作品群と、明治美術会系の作品群との表現・画風の違いが明らかとなり、これを境にして黒田たちを新派・紫派、明治美術会系を旧派・脂派という呼称で位置付けられることになる。その結果、翌年6月には黒田、久米、合田清等を中心に白馬会を結成するに至る。白馬会は濁り酒「シロウマ」から名付けられたといわれ、明確な会則はなく、役員もおかず、自由平等を標榜した会員たちによる作品を展示する展覧会を開催し、1911年3月に解散するまで13回の展覧会を開催し、明治後半期の洋画界をリードし、和田英作、藤島武二、青木繁、岸田劉生など多くの画家を生み出している。一方、同年5月東京美術学校に西洋画科が創設されて講師となり、1898年に教授に就任し、本格的な西洋画教育の指導者としてアカデミズムという制度を築く役割を担うことになる。黒田はその目標を、歴史、神話、宗教、思想、哲学などの抽象的な概念をイメージとした群像によって構成する大画面の構想画や歴史画においた。その構想画が《昔語り》であり、裸体女性像三面からなる《智・感・情》(東京国立博物館蔵)であった。《智・感・情》は日本人女性をモデルにつかった裸体像で公にされた最初の作品で、1897年の第2回白馬会展に出品された後、加筆されて、1900年のパリ万国博覧会に《湖畔》などと共に出品された。その後も黒田は《花野》などで構想画を試みるが、いずれも未完に終わっている。黒田の意図した構想画・歴史画は、本来、主題そのものを歴史から得たイメージから表現するために構成された絵画であったが、それが矮小化され東京美術学校の卒業制作や白馬会には明治の風俗画として表現されるようになる。1907年には黒田が主張し、働きかけてきた政府主催の公募形式の美術展である第1回文部省美術展覧会(文展)が開催される。美術団体の区別がなく応募でき、審査によって入選、受賞がきめられるものであった。白馬会も文展を主たる出品場所となったため、1910年の白馬

会展を最後に解散される。同年10月には帝室技芸員に任命され、名実ともに国家の洋画家となる。これ以後の黒田は画家というより美術行政家としての活動が多忙となり、1917年養父清綱が歿し子爵を襲爵、1920年貴族院議員、1922年帝国美術院院長などの要職につき、1924(大正13)年7月15日、東京で逝去する。

黒田は版画の画家ではない。しかし、白馬会や東京美術学校における自由な創作活動は、その後の創作版画的源泉を作ったとも思われる。黒田が日清戦争に従軍画家として描いた《占領後の金州城》などの作品を、合田清が木口木版に起こして『ル・モンド・イリュストレ』に送った版画、《寅の正月》(クロモ石版、『時事新報』1902.1)、《文芸界第1号表紙絵》(クロモ石版、1902)、1905年に創刊の白馬会機関誌『光風』(12号で終刊)誌上に《銚子写生の内》(伊上凡骨彫、多色木版、1号・2号)・《瀧の白糸》(木版、1号)・《近藤智敬肖像》(合田清刻、木口木版、2号)・《なさけ》(伊上彫、多色木版、5号)・《故床次正精君》(合田刻、木口木版、5号)・《故松山》(伊上彫、多色木版、8号)を見ることが出来る。なお黒田は1919(大正8)年バーナード・リーチが我孫子の柳宗悦邸内に設けた工房が焼失した後、麴町の邸内にリーチを援助し東門窯が設けられる。【文献】『黒田清輝について』(東京文化財研究所 www.tobunken.go.jp/kuroda/gallery/japanese/kuroda.html) (森)

黒田坊也(くろだ・ぼうや) → 黒田嘉治(くろだよ・しはる)

黒田嘉治(くろだ・よしはる) 1908～1984

1908(明治41)年3月29日東京市浅草区に生まれる。号は坊也。1926年東京中学校を卒業し、東京美術学校彫刻科塑造部に入學。建島大夢に学ぶ。在学中、1929年の第10回帝展に「黒田坊也」の名で彫刻《少女座像》が初入選。翌年の第11回展にも《立女》が入選した。また、校友会版画部に属し、1930年11月の版画部主催の版画展に木版画(作品名不明)を1点出品している。1931年東京美術学校彫刻科塑造部本科を卒業。卒業後は、同年の第12回帝展で特選を受賞。1933年には帝展無鑑査となり、官展系の彫刻家として歩んだ。戦後は1947年の第3回日展から再び同展に出品。日本国際美術展(1957・1959・1963・1965・1967)、現代日本美術展(1958・1964・1966・1968)などにもたびたび出品した。1958年の社団法人日展の発足にあたっては評議委員に就任。1959年の改組第2回日展出品作《立つ女》で文部大臣賞受賞。1979年には日展参与となっている。1984(昭和59)年12月12日東京都世田谷区等々力で逝去。【文献】伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』図録(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010)／『校友会月報』29-7(東京美術学校 1931.1)／『日本美術年鑑』昭和60年版(東京国立文化財研究所 1987) (三木)

黒滝俊雄(くろたき・としお) 1907～1988

1907(明治40)年青森県弘前市に生まれる。1926年に駒澤大学専門部に入學。翌年予科に転じ、同時期に本郷絵画研究所夜間部に入所。この年に穴沢起夫、常田健、内海九郎らと洋画グループ「未青社」を創立し、1933年には佐藤麻吉らを迎え「紀元社」と改名する。なお、この紀元社については『むつごま』第7号(1939.4)に黒滝が近況を寄せ、第7回展を開催する旨を記している。

一方、1937年には僧侶として黒滝大休となり弘前市に現存の曹洞宗種里山鳳松院二十九世を継承。1968年弘前美術作家連盟を創立させ、委員長に就任。1971年津軽書房より『画譜印度仏蹟巡拝』を上梓。1976年鳳松院位牌堂の壁画《釈迦一代記》を油絵8枚により完成させる。画号は大休。版画の活動については、東京において永禮孝二、兒玉壘、荒井東留の3人が発行した版画誌『刀の跡』第5輯(1932.4)に《樹陰》を発表。翌1933年には弘前で下山(下澤)木鉢郎、桑田恵造の3人により版画誌『版曹』(1933～1934)を創刊。第1輯(1933.2)には《苺》と前記の『刀の跡』第5輯に発表した《樹陰》を《花鳥》というタイトルに変えて再録。第2輯(1933.4)に《少女》を発表するが、終刊と思われる第3輯には作品は掲載されていない。同年の青森県黒石市で安藝精一が発行した版画誌『版画精神』第2集(1933.6)には《挿画》を発表。また佐藤米次郎が発行した『趣味の蔵書票集』第2回(1937.8)に蔵書票《弥勒》を発表する。1988(昭和63)年逝去。【文献】「創作版画誌投稿作家一覧」『緑の樹の下の夢 青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館 2001)／『創作版画誌の系譜』(加治)

黒水武夫(くろみず・たけお)

1910(明治43)年福岡県に生まれる。1927(昭和2)年に謄写版にふれ、翌年開業。「鐵に刻む精神」「誰をも信頼する」をモットーに八幡市で黒水謄写堂を営みながら謄写誌『謄写研究』を発行し、広く技術者、愛好者の間をつなぐ役割をはたした。戦後、戦災や疎開で散り散りになった技術者たちの消息をたずね、人名録『後塵録』を編集刊行した様から、戦前から幅広い交友関係をもっていたことがうかがえる。また「九州謄写美術展」(1946年・47年)を企画し、各地の技術者、作家から出品を得ている。【文献】黒水武夫編『後塵録』(日本謄写美術協会 1947)／『謄写研究』4-9・4-10・4-11・4-12(黒水謄写堂 1947)(植野)

黒柳 暹(くろやなぎ・せん)

長野県下水内郡の小学校教師を中心とする下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第1号(1934.9)に《残雪ノ妙高》、第2号(1935)賀状号に《池辺の鶴》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

【け】

源太(げんた)

1915年から翌年にかけて、《深川平井橋》《常盤橋》などの多色木版画(限定100部 各18×25cm)の制作がある。【文献】『山田書店新収目録』58(2003冬)／『版画堂』目録106(2014.12)(樋口)

【こ】(前半)

小合保一郎(こあい・やすいちろう)

1936(昭和11)年に中井平三郎が中心となって結成された京都エッチング協会会員に名を連ねる。【文献】『エッチング』47(樋口)

五井道夫(ごい・みちお)

1932(昭和7)年の第2回日本版画協会展に《窓外風景》

《阿佐ヶ谷静景》を出品。【文献】『第二回日本版画協会展覧会目録』(三木)

小池萬吉(こいけ・まんきち)

長野県師範学校一部5年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』第1号2598年版(1938)に《夏の日》を発表する。1939年同校を卒業。【文献】『樹水』1／『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)(加治)

小石原 勉(こいしはら・つとむ)

1937年7月(開催日は不明)、西田武雄を講師に招いた京都でのエッチング講習会に北脇昇、小牧源太郎らとともに参加。『エッチング』誌第58号(1937.8)に図版が掲載される。なお図版では「京都 独立美術 小石勉」とあるが、「小石原勉」の誤記と思われる。【文献】『エッチング』58(樋口)

小泉勝爾(こいずみ・かつじ) 1883～1945

1883(明治16)年8月30日東京品川に生まれる。青堂と号す。1907年東京美術学校日本画科卒業後は、一時期茨城県龍ヶ崎の中学校に勤務。1912年川崎小虎、広島晃甫、水島爾保布らと新しい日本画の研究会「行樹社」(1912～1917)を結成。1913年東京美術学校で結城素明の助手を勤め、1916年助教授に就任。1917年第11回文展に《彩園雨後》で初入選し、以降は帝展にも出品を続ける。1922年日本画の小集団が集まって結成された第一作家同盟(DSD)に参加する。1931年第12回帝展に《濤声》で特選。1933年東京美術学校教授となり、後進の指導にあたる。1944年学校改革で東京美術学校を退職。1945(昭和20)年7月28日逝去。風景画や花鳥画を能くし、土岡春郊と共著で『鳥類写生図譜』(鳥類写生図譜刊行会 1928～1938)の刊行などがある。版画の制作は、『現代俳画集』(俳画堂 1918.7)に木版画《猫》1図の制作があるほか、行樹社時代に、風景版画会(本所区相生町)の依頼で第1作目として木版画《品川台場横町》頒布の広告が『美術週報』第2巻第39号(1915.9)、『美術新報』第14巻第12号(1915.10)、『美術と文芸』第6号(柳屋 1916.5)などに掲載されるが、作品は未見。なお第2、3作目として、同じく行樹社同人小林源太郎に依頼の《常盤橋》《深川平井橋》2図の頒布については、『美術週報』第104号(1916.4)の広告に「其第三回として小林源太郎氏筆の「深川平井橋」を発行したり。」と報じられている。【文献】『中央美術』2-1(1916.1)／『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1997)(樋口)

小泉癸巳男(こいずみ・きしお) 1893～1945

1893(明治26)年6月23日旧幕臣の書家小泉松備(本名・謙吉)の第五子として静岡市下桶屋町に生まれる。戸籍名は「癸巳雄」。木版職人から版画の道に進み、日本創作版画協会の会員となる。同展出品回数7回(第1・2・4～8回展)。その後の日本版画協会展出品回数11回(第1・3～10・12・13回展)に及ぶ。風景版画を得意とし、代表作に関東大震災後の東京風景を描いた《昭和大東京百図絵》がある。1909年に画家を志して上京、当初は日本水彩画会研究所で絵画を学ぶ。講師であった戸張孤雁、織田一磨を知る。1912年彫師・堀越貫一の木版工房へ入り彫版技術を修得。この間に山本鼎らの作品に触れる。1913年には日本水彩画会創立の発起人となる。日本

水彩画会展へは15回(第1~8・10~14・18・22回展)水彩、版画を出品。また光風会展にも6回(第4~6・8・10・13回展)水彩を出品する。大正期の版画において小泉が尽力したのが木版画の普及である。1915年木版画の大衆化を試み木版画用具の頒布を行う。1916年には木版画の用具や技法等を綴った「木版画に就いて」を『みづゑ』(第137・138・140号)に連載。1919年日本創作版画協会会員に推挙される。1920年織田一磨との版画二人展「夜の版画夜咲く花」を資生堂にて開催。1921年には旭正秀と版画雑誌『版画』を創刊(翌年第3号まで刊行)。次いで1922年大河内信敬、見目泰と、詩と版画誌『君と僕』を創刊(翌年第5号まで確認)。1924年には技法書『木版画の彫り方と刷り方』(春鳥会)を刊行。その他、創作版画講座の開設、作品頒布会も行った。その後、昭和初期からの小泉は自らの版画制作に邁進する。1927年に旧満州(中国東北部)へ写生旅行に赴き、帰国後の1928年第8回日本創作版画展には《埠頭玄関(大連)》他10点に及ぶ満州シリーズを発表。同年の第9回帝国美術院展には《永代と清洲橋》を出品。1929年には第7回春陽会展に《都会風景》出品。同年、松村松次郎らが創刊した版画雑誌『版画』(素描社)同人として作品を発表(翌年第5号まで確認)。1930年からは《昭和東京風景版画百図絵》(後に《昭和東京百図絵》と名称変更)に着手、頒布会員を募り約7年にわたり制作を行う。1934年第12回春陽会には百図絵より《春の動物園》他1点を出品。1936年《国立公園日光風景版画》(全12景)を制作し、頒布会を開催する。1937年《昭和東京風景版画百図絵》が完成。1940年『エッチング』第89号に「自伝」を寄稿。1941年「小泉癸巳男創作・昭和大東京百景版画展覧会」を上野・松坂屋にて開催(翌年は横浜・野沢屋で開催)。同年、西田武雄のエッチング講習会に参加し銅版画を始める。また、この頃より《聖峰富岳三十六景風景版画》の制作に取り組むも、1945(昭和20)年12月7日疎開先の埼玉県比企郡南吉見村江綱、伊田勘三郎氏方にて喘息のため逝去。翌年、未完の遺作「聖峰富岳三十六景風景版画展」(全23景)が日本橋三越にて開催された。【文献】『日本版画協会史1931-2012』(日本版画協会2012)／『創作版画誌の系譜』／『小泉癸巳男昭和震災興記念大東京百図絵展図録』(信州新町美術館2012)／『日本近代銅版画展図録』(西宮市大谷記念美術館1982)(前澤)

小泉壽夫(こいずみ・ひさお)

1936年8月8・9日の両日、関西小国民社に於いて開催された京都エッチング協会主催(中井平三郎幹事、西田武雄講師)のエッチング講習会に参加。京都エッチング協会会員に名を連ねる。【文献】『エッチング』47(樋口)

小泉直(こいずみ・なお)

1938(昭和13)年4月の造型版画協会第2回展に《観衆》(木版か)を出品。出品時は東京に住む。【文献】『造型版画協会第二回展目録』(三木)

小泉秀雄(こいずみ・ひでお) 1900~没年不詳

1900(明治33)年11月京都市に生まれる。その後、海外に移住したらしく、1920年ペルーより帰国。葵橋洋画研究所、同舟舎洋画研究所で洋画を学び、1926年の第3回白日会展に油彩画《花》、翌1927年の第4回展に《アネモネ》が入選。また、1927年からは国画創作協会展第

二部洋画にも出品し、同年の第6回展に《紅椿》、翌年の第7回展に《池畔の新緑》など4点が入選。第7回展ではブックス賞を受賞し、1928年の『美之國』6月号の「第七回国画創作協会展受賞者」に顔写真入りで経歴が紹介されているが、この頃は梅原龍三郎、小林利作に師事していたようである。1929年には新発足した国画会の最初の展覧会である第4回展に《伊豆風景》が入選するも、画歴にしばらく空白があり、次に確認できるのは1932年の第7回展で、木版画《増》が入選している。この作品について平塚運一は、「小泉秀雄氏の「増」は古い能面の不思議な感覚をよく現はしてゐるし、単純に掴み乍らよく丸味を持たせてある」(「国展の版画」『美之國』8-6)と評している。以後の足跡は不明である。【文献】「第七回国画創作協会展受賞者」『美之國』4-6(1928.6)／平塚運一「国展の版画」『美之國』8-6(1932.6)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所2006)(三木)

小泉素彦(こいずみ・もとひこ)

洋画家。戦前の版画制作として、山岸主計彫・漆原木虫摺による木版画《暁の富》や中国に取材した《蘇州虎邸》《漢水を隔てて漢陽を望む》などの作品がある。1938年海軍従軍依嘱画家として中国に赴く。この頃の作か。【文献】『山田書店新収目録』62(2004夏)／「昭和十三年中海軍従軍画家」(東文研アーカイブデータベース2015.1)(樋口)

小泉与吉(こいずみ・よきち)

1906(明治39)年3月25日富山県高岡市に生まれる。1924(大正13)年、小説を自費出版したことがきっかけで謄写印刷をはじめる。文芸同人誌『朗陽』を創刊し、1926年に大阪に出て「朗陽社」を開業、謄写印刷による『朗陽』を刊行した。1928(昭和3)年に謄写印刷工房を開業、1932年から良質な謄写印刷と機材販売で知られた淡紅社が発行する『謄写版界』の編集と印刷を手がけた。定規を使って読みやすく安定したゴシック体の文字を書く「パイロット製版」を完成させた技術者として知られているが、その『謄写版界』創刊号で、謄写版は「昭和の版画芸術」であるとして「創作版画出よ!」と呼びかけ謄写版による創作版画を提唱したように、謄写版による絵画製版にも熱心だった。小泉は大阪で盛んだったポスターやちらしなどの商業印刷が発展して版画芸術となることを期待しており、その後、1935年に自身で創刊した『謄写版』誌上でも繰り返し創作版画の制作を読者に勧めている。誌上で発表した小泉の絵画製版は「版画」とみなされ、1933年に刊行された島屋政一『印刷文明史』第5巻でも「孔版版画」として紹介されている。ここに取り上げられた図版は、『謄写版界』掲載の口絵で、画家が描いた原画をもとに小泉が製版したものであり、創作版画家たちが提唱するところの「自画・自刻・自摺」ではない。しかし、和紙を版とする謄写版独自の表現力を引き出し、見る者を謄写版による版画制作に誘う十分な魅力を持っている。『謄写版』は、器材、資材の販売を目的にするのではなく、謄写印刷技術の研究と技術者から愛好家まで幅広い読者の交流を目的とし、千部を発行するまでになったが、戦時下の物資不足から1940年廃刊。1945年3月の大阪大空襲で工房が焼け、1946年に郷里に戻った。郷里の高岡市では、『泉』(のちに改題『萬華』)を創刊、宗

教的とも感じられる思惟を深める一方、若い技術者や作家を暖かく励まし続けた。1972（昭和47）年逝去。【文献】『謄写版界』1・4（淡紅社 1932）／島屋政一『印刷文明史』第五卷（印刷文明史刊行会 1933）／『組合史』（大阪府軽印刷業協同組合 1978）／上田裕『孔版家列伝 - ガリ版文化をつくった人々 小泉興吉』『ガリ版文化史』（新宿書房 1985）／須永襄編『昭和堂月報の時代』（大日本印刷株式会社 ICC 本部 2000）（植野）

小磯良平（こいそ・りょうへい）1903～1988

1903（明治36）年7月25日神戸市に生まれる。昭和期を代表する洋画界の巨匠で、卓越したデッサンによる数多くの石版画・銅版画を制作したことでも知られる。旧姓は岸上。1922年東京美術学校西洋画科に入学。藤島武二に学び、在学中の1925年の第6回帝展に初入選。翌年の第7回帝展に出品した《T嬢の像》で特選を受賞するなど、早くから頭角を現し、1927年東京美術学校西洋画科を首席で卒業。1928年から1930年まで渡仏。その間、グラン・ショミエールに学び、1929年のサロン・ドートンヌに入選している。帰国後の1931年光風会会員。翌1932年の第13回帝展に《裁縫女》を出品し、再度特選を受賞。官展系の作家としての地位を固め、1934年に無鑑査になったが、1936年の帝展改組に反対。同年、光風会・官展を離れ、猪熊弦一郎らと新制作派協会（1951年新制作協会と改称）を創立。以後、同展を中心に活躍したほか、1938・1940・1942年には陸軍省の派遣画家として中国・ジャワなどに従軍。戦争画を描き、1940年第11回朝日文化賞、1942年第1回芸術院賞を受賞した。版画は、1932年に石版画を初めて試みたが、同年5月に新同人として参加した洋風版画会第3回展に《食後》などを出品。12月には日本版画協会会員に推挙されている。翌1933年に最初のリトグラフ展（1.24～27 神戸・画廊）を開催。続いて、1935年の第4回日本版画協会展及日本現代版画米国展準備展観に石版画《化粧する女》《鏡の前》《港》《座せる女》《桃われの娘》《踊り子》《裸婦》の7点を出品。また、この時の出品作に、《踊り子》をさらに1点追加し、1936年2月の「日本の古版画と現代版画展」（ジュネーブ市博物館、5月マドリッド近代美術館巡回）にも石版画8点を出品した。翌1937年にはベリン・オリンピックの芸術競技に版画《学生相撲》（石版画か）2点を出品。また、1939年の『エッチング』第79号に銅版画《踊り子》の図版が掲載されており、この頃までに銅版画も手掛けていたことがわかる。戦後は、新制作展の他、日本国際美術展（1952～1963・1968）、現代日本美術展（1954～1969）などに第1回から出品する一方、1950年東京藝術大学油画科講師、1953年より教授となり、1971年に退官するまで後進を育てるとともに、1958年の版画教室設置にも尽力した。また、中断していた自身の版画制作も再開し、1968年に銅版画展（3月18日～30日 大阪・梅田画廊）を皮切りに、数多くの版画展を開催した。1982年日本芸術院会員。1983年文化勲章を受章。1988（昭和63）年12月16日神戸市で逝去。1992年には神戸市立小磯良平美術館が開館している。【文献】『日本版画協会々会報』1（1933.3）／『第4回日本版画協会展及日本現代版画米国展準備展観』図録（1935）／『ESTAMPES JAPONAISES ANCIENNES ET MODERNES』図録（ジュネーブ市博物館 1936）／『エッチング』79（1939.5）／「小磯良平年譜」『小磯良平生誕100年記念 小磯良平の青年時代』図録（神戸市

立小磯良平記念美術館 2003）（三木）

小出楢重（こいで・ならしげ）1887～1931

1887（明治20）年10月13日大阪市に生まれる。生家は「天水香」で知られる古くから続く薬舗。1907年大阪府立市岡中学校卒業。上京して東京美術学校西洋画科を受験するが不合格となり、日本画科に入学する。2年間日本画を学ぶが、洋画への思いは強く、白馬会の原町洋画研究所で洋風デッサンを学んで、西洋画科1学年へ転科。1914年同校卒業後は大阪に戻り、以来大阪を拠点とする。1915年日本美術院洋画部門に《山の初夏》を出品し公募展初入選するが、文展には4度続けて落選。1919年広津和郎らのすすめで第6回二科展に油彩画《Nの家族》を出品して「樗牛賞」を受賞。翌1920年第7回二科展で油彩画《少女お梅の像》が二科賞を受け、会友となる。1921年8月フランス留学のために渡欧するが、僅か8か月で切り上げ、翌1922年4月には帰国する。同年二科会会員となる。この頃よりガラス絵の制作にも力を注ぐ。1924年小出楢重、黒田重太郎、国枝金三、鍋井克之の4人で大阪に信濃橋洋画研究所を創設し、関西の洋画普及に大きな役割を果たす。1926年芦屋に転居。油彩画やガラス絵制作のほか、『大阪毎日新聞』、『大阪朝日新聞』などに国枝完二「雨中双景」、室生犀星「夫婦」、谷崎潤一郎「蓼喰う蟲」などの連載小説の挿絵を描く。1930年油彩画《枯れ木のある風景》（1933年1月『改造』に発表された宇野浩二による同題の短編小説の主人公としても知られる）を描き、1931（昭和6）年2月13日急逝した。版画の制作は、渡欧前年の1920年にエッチング《江子島》、美術雑誌『マロニエ』第1巻第4号（1925.9）表紙絵に木版画《裸婦》（西上柳水刀）を制作。岡田三郎助、織田一磨らが1929年に結成した洋風版画会同人として第1回展（1930.5）にのみ、エッチング作品を出品する。その後1931年1月日本創作版画協会と洋風版画会その他の版画家合わせて42名で結成された日本版画協会設立に参加するも、同年2月13日急逝のため、2月に作成された同協会創立会員名簿には小出の名は記されていない。制作年は不明だが、小出作と思われる木版画《〔後ろ向き〕の裸婦》、1942年頃とされる大判の木版画《美神誕生図》の制作。また谷崎潤一郎『蓼喰う蟲』など装幀も多く手がけ、すぐれた作品を残している。【文献】『日本近代銅版画展』図録（西宮市大谷記念美術館 1982）／『近代日本版画大系』3（毎日新聞社 1976）／『没後70年 小出楢重展』図録（名古屋市美術館・京都国立近代美術館・〔横浜〕そごう美術館 2000 - 2001）／岩切信一郎「日本近代版画資料集成（1923～1929）『東京文化短期大学紀要』19（2002.3）／三木哲夫「日本創作版画運動 関連年表 1904 - 1945」『日本近代の青春 創作版画の名品』（和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010）／美慶ホームページ「アート楽美術館 秦俊一コレクション」（樋口）

小出光雄（こいで・みつお）

長野県下水内郡の小学校教師を中心とする下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第3号（1936.7）に《梅に鶯》を発表。当時、郡下（現・飯山市立）常盤小学校（現在廃校）に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

小糸源太郎（こいと・げんたろう）1887～1977

1887（明治20）年7月13日東京市下谷区（現台東

区)に生まれる。本名は小糸。1911年東京美術学校金工科を卒業、同年あたらめて西洋画科に入学した。1914年病のため同校を中退。在学中の1910年第4回文展に油彩画が初入選。初期には印象派、後期印象派風の画風で制作した。1918年第12回文展の初日に誤解から自作を破る事件を起こして自ら一時出品を中断したが、1925年に展覧会出品に復帰した。それ以後は中国院体画風の細密描写によって静物画を多く制作した。1929年、小糸と署名するようになる。1930年と1931年の帝展で連続して特選受賞、1931年にはその一方で光風会の会員となった。以後、戦前は官展と光風会を中心に活動した。1933年にはじめて帝展審査員を務め、1942年には新文展の審査員を務めた。戦後は日展、光風会展、日本国際美術展、現代日本美術展などに出品し、力強い筆触、強いコントラストの色彩、簡潔なフォルムによる独自の画風を展開させた。1959年に日本芸術院会員に推され、1965年には文化勲章を受章した。版画の制作は少ないが、1915年発行の役者大首絵集『新似顔』(似顔洞刊)1年5編に《彦三郎の玄著》(木版、彫・伊上凡骨)を制作。また、1933年刊行の摺師・西村熊吉による広重の名所江戸百景の復刻と現代の画家の新作版画を組み合わせた木版画集『西村熊吉版』(彫り・岡田清次郎)第1輯に《不忍の富士》を制作していることが確認できる。1977(昭和52)年2月6日東京で逝去。【文献】『岡田三郎助、小糸源太郎』(集英社 1975)(滝沢)

小井戸藤政(こいど・ふじまさ) 1909～1945

1909(明治42)年3月9日岐阜県高山に生まれる。1921年高山男子尋常高等小学校を卒業し、郵便局に勤める。版画は小学校時代の恩師武田由平に学んだ。1938年頃に守洞春が中心になり、高山で出版された版画誌『版系』の創刊号と慰問号(1938)に参加し、木版画を発表。また、1940年に清永完治が中心となり、釜山で出版された版画誌『創作版画 朱美之集』にも第2冊(1940.8)から「小井戸藤正」の名で参加し、第5冊(終刊号 1942.8)まで木版画を発表した。公募展は1940年の第15回国画会展に木版画《雪ノ山》が初入選。また、同年の第9回日本版画協会展にも木版画《春日》が初入選。以後、1941年の第10回展に《鶏頭花》《残雪ノアル風景》《海老坂風景》、翌年の第11回展に《雪(高山市城山公園)》《金龍ヶ丘展望台から》がそれぞれ入選した。その後、1944年に会友に推挙されたが、出品はしていない。同年か、海軍に応召され、1945(昭和20)年3月19日戦死。1946年2月の『日本版画協会々報』には、「小井戸藤政。応召戦死(輸送船にて)」と記されている。2014年には、長男との二人展、「小井戸洗二・小井戸藤政版画作品展」(7.20～23 高山市民文化会館)が開かれた。【文献】『日本版画協会々報』37・1946年2月号／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』／小井戸洗二氏聞き書き(2015.2.1)(三木)

小糸元雄(こいと・もとお)

大阪堺市で発行の大判の版画誌『羊土』第1号(1931.6)に木版画《人物》、白桐石版画《壺の花》を、第2号(1932.12)にリノカット《鐘楼》《朝鮮人形》を発表。木版画、石版画などさまざまな版に挑戦しており、「白桐石が版画に適するかは未だ疑問とするが、試験的に(中略)版画に充分防水液を塗ったのが此の結果である。」(『羊土』1)と

言葉を残している。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

幸内純一(こううち・じゅんいち) 1886～1970

1886(明治19)年9月岡山市に生まれる。1906年太平洋画会研究所で学ぶ。1907年北沢楽天の東京パックに入社し、政治漫画を描く。その後は東京毎夕新聞社をへて、映画制作会社の小林商会に入社。アニメの制作に従事し、1917年第1作となる「なまくら刀」を完成、日本最初期のアニメーション作家のひとりとなる。1918年経営難となった小林商会から東京毎日新聞社に移り、漫画やアニメの制作、演出などを手掛け、1923年アニメの制作会社を設立するが続かず、1932年読売新聞社に入社して風刺漫画を描く。その後は時事新報絵画部長などをつとめた。1970(昭和45)年逝去。版画との関わりは、武井武雄主宰「版交の会」(第3回からは「榛の会」と改称)に第3回(1937)から第20回(1954)まで連続して木版賞状を制作。第22回は不参加。第21回と第23回以降は未確認。当時の住所は第3回から第10回(1937～1944)は渋谷区羽澤、第12回から第20回(1946～1956)は武蔵野市吉祥寺に在住。その他の版画制作については不明【文献】『榛の会会員名簿』第1回から第20回(第11回は未見)／市道豊和「奇跡の成立」榛の会昭和21年一芸術集団の戦中・戦後一(室町書房 2008)／「幸内純一」(ウィキペディア 2015.2.1)(樋口)

甲賀喜八郎(こうが・きはちろう)

静岡の版画仲間は童土社を立ち上げ、版画誌『ゆうかり』(1931～1935)を発行する。その第1号(1931.1)に《渡船場》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

上阪雅人(こうさか・がじん) 1877～1953

1877(明治10)年5月10日京都市上京区に生まれる。本名雅之助(まさのすけ)。はじめ日本画を志し、幸野楳嶺の画塾を経て1894年山元春挙に入門、一峰と号する。図画教師をしながら制作、1903年第5回内国勧業博覧会に《春光》が入選。1907年30歳で上京、洋画に転向し、白馬会洋画研究所や太平洋画会研究所で学ぶ。ミシン刺繍の下絵および加工を生業とするが、1918年から画業に専念。木版を永瀬義郎に学んだとされ、1922年《海邊》で日本創作版画協会第4回展入選。版画家としては本名のほか「雅之」「雅」とも号した。関東大震災に際しては惨状を版画葉書となす。日本創作版画協会に1924年の6回展から8回展に連続入選。昭和初年には図画教育や教科書の編纂にも従事。1939年の造型版画協会第3回展に入選。日本版画協会展では1941年の10回展、1942年の11回展、1944年の13回展に入選。1942年の春陽会第20回展、同年の国画会第17回～19回展でも入選を続けている。版画誌への参加は少なく、『HANGA』第2輯(1924.5)に収められた《復興の銀座街》と第9・10輯合併号(1926.7)の《風景》が知られる。戦中1945年に罹災、作品の大部分を焼失して仙台へ疎開。戦後は数年の闘病生活を経て1948年に「雅人」と号して制作を再開、滲みを多用した骨太で抽象的な墨摺作品が進駐軍関係者の注目するところとなる。同年日本版画協会会員に推薦され、1949年3月帰京。1950年以降ロサンゼルスやパリでの展覧が相次ぎ、国内よりも国外で高く評価された。1953(昭和28)年9月18日東京都新宿区で逝去。【文献】上阪建「父・雅人の生涯」ロジェ・ヴァン・エック「パリ通信 上阪雅人の遺作展」『みづゑ』609(1956.4)

／『日本美術年鑑』昭和32年度版(1958.3)／『四人の作家：菱田春草、瑛九、上阪雅人、高村光太郎』(東京国立近代美術館1960)／上阪建「父・雅人の芸術と追憶」『現代の眼』66(1960.5)／奥山儀八郎『日本の木版画』(私家版1977)／『内国勸業博覧会美術品出品目録』(東京文化財研究所1996)／『版の絵』7(小野忠重版画館1998.10)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前編』(東京文化財研究所2006)(西山)

上阪 建(こうさか・たける) 1924～2004

1924(大正13)年1月1日東京品川区大井町に生まれる。上阪雅人の次男。日本版画奉公会会員名簿に記載があるが(『エッチング』123(1943.4))、版画制作については知られていない。父・雅人についての文章を残している(上阪雅人の項参照)。2004(平成16)年7月1日東京都文京区にて逝去。【文献】『エッチング』123(西山)

鴻 聲(こうせい)

大正期頃、総山、佳恵などと同様に、輸出用と思われる花鳥の細判木版画の制作が知られるが、詳細は不明。(樋口)

光 雪(こうせつ)

生没年未詳。今のところ2点の版画で知られる。「大正十三年／光雪」(一九二四年)と落款がある横判《「祇園の観桜」と、さらに同年作と推定の《「鷺」図がある。大阪生まれの「本名峰内鉄二」との説もある。【文献】『近代日本版画大系』3(毎日新聞社1976.6)／『LIGHT IN DARKNESS Women in Japanese Prints of Early Showa(1926 - 1945)』(Fisher Gallery, University of Southern California 1996.3.7～4.20)(岩切)

合田 清(ごうだ・きよし) 1862～1938

フランスから本格的な木口(西洋)木版技術を齎した人物。1862(文久2)年5月7日、幕臣田島鍋吉の次男として江戸に生まれる。兄の応親(まさちか)が結婚した儒者合田錦園の長女はるの妹・舜子と結婚し、合田家に入籍する。兄の応親は榎本武揚の旗下、函館戦争に参加、維新後は兵部省に出仕し、1880(明治13)年応親のフランス公使館付武官として赴任するに伴い、清も農学を学ぶために渡仏する。しかし、滞仏中の画家山本芳翠の勧めに従いシャルル・バルバンについて木口木版術を学ぶ。入門4年後の1885年にはフランス美術協会のサロン展に入選、翌年のサロンにもエミール・アダン《一日の終わり》の模刻で入選する。1887年に山本芳翠と共に帰国し、翌年3月、秀英舎(現在の大日本印刷株式会社)の佐久間貞一の援助を受け、芳翠と芝区桜田本郷町14番地(現・港区西新橋一丁目)に弟子の養成と彫刻依頼に応じた生巧館を設立。生巧館は一階が合田の生巧館木版部、二階は芳翠の生巧館画学校であった。木版部では、設立間もなく大阪から進出した『東京朝日新聞』創刊号(1888.7.10)の附録として山本芳翠原画・合田清刻《貴顕の肖像》(明治天皇像)、7月15日に磐梯山噴火の折、山本が現地に出張し、惨状を直接下絵に描き、合田が彫刻した《磐梯山噴火真図》が同新聞8月1日附の新聞附録となり、初期の代表作である。『東京朝日新聞』は

元日号に毎年、干支に因んだ生巧館刻の摺り物を附録とするのを恒例とした。各種一枚物の他、『高等小学読本』(1888・1889 文部省)や『谷間の姫百合』(全4冊、1888～1890 金港堂)などの挿絵、『国民之友』『太陽』『日清戦争実記』といった雑誌の表紙や挿絵、単行本の口絵・挿絵など幅広く手懸けている。1891年には業務繁忙となり赤坂区溜池町3番地(現・港区赤坂一丁目)に生巧館工場を設立し、日本に本格的な西洋木口木版を定着させる。1893年に帰朝した黒田清輝、久米桂一郎らに、翌年10月、桜田本郷町の生巧館を譲り、洋画指導研究所「天真道場」が開所され、生巧館は溜池の工場に移転している。合田自身は麴町平河町の黒田邸と背中合わせの地に住み、以後、黒田と頻繁な交流が結ばれ、黒田が日清戦争に従軍画家として日本に送った作品を版に附して『ル・モンド・イリュストレ』に送ったり、1896年には黒田、久米等と洋画団体白馬会を創立に参加し、また東京美術学校西洋画科創設以来、1932年まで30年にわたりフランス語講師を勤めている。1899年には溜池の生巧館の一部を開放して、白馬会絵画研究所が開設され、そこに学んだ清宮彬・岡本帰一・岸田劉生や木版部の菊地武嗣・山形駒太郎・馬淵録太郎らによって版画雑誌『白刀』が1909・1910年頃発刊されている。1938(昭和13)年5月6日逝去。【文献】馬淵録太郎『木口木版伝来と余談』(私家版1985)／丹尾安典「近代の彫師・合田清」『日本の木口木版画一明治から今日まで一』図録(板橋区立美術1993)(森)

合田岬一(ごうだ・こういち) 1908～1975

1908年香川県三豊郡豊浜町(現在の観音寺市)に生まれる。本名は合田正隆(まさたか)。料治熊太発行の版画誌『白と黒』の創刊編集に加わった南屋音彦(本名=合田好道は洋画家・陶芸家)は弟。1916年父母弟と共に朝鮮慶尚北道興海に移住。1919年には弟好道と二人で帰国し、祖母と暮らす。祖母が亡くなった翌1925年には大分県別府の親戚宅に転居する。1930年には、先に画家を志望していた弟を頼りに上京し、図案の勉強をする。弟の関係から料治熊太と知り合い版画を制作するようになる。料治の主宰する版画誌『白と黒』第12号(1931.3)に《孔子廟》、第13号(1931.4)に《桃島》、第16号(1931.7)に《酒壺》、第17号(1931.9)に《夕立》など朝鮮の風俗や風景の木版画を、第15号(1931.6)には《自画像》を発表。その後、父親が暮す朝鮮の京城に渡り、丁子屋百貨店宣伝部長として働く。戦後は郷里の香川に引き揚げ、看板業の株式会社「南屋」を創業。その後は次男の勁(つよし)に家業を譲り、引退後は絵や陶芸を楽しむ。1975(昭和50)年逝去。(以上長男合田習一氏からの情報による)【文献】『合田好道展 壺中の天地』図録(益子町観光振興公社2002)／『創作版画誌の系譜』(加治)

合田好道(ごうだ・よしみち)⇒南屋音彦(みなみや・おとひこ)

耕 涛(こうとう) 生年不詳～1912

大倉耕涛。彫師名人の大倉半兵衛の息子で勝太郎。尾形月耕門下。明治20年代から30年代の日本青年絵画協会及び絵画共進会に出品。錦絵では、日清戦争にまつわる武勇談を題材にした大判錦絵整絵シリーズ『日本魂』(1895)全25枚、《日本連捷双六》(耕晧と合作、田村為吉版)、《日軍平壤大進撃之図》(大判錦絵3枚続絵)などが知られる。1912(明治45)年逝去。【文献】『山田書店新収目録』69(2005冬)(岩切)

廣南(こうなん) → 谷上廣南(たにがみ・こうなん)

河野 温(こうの・あつし)

文化学院専修科は1933年4月から石版や肖像画等の講習会を始め、エッチングについては第1回を10月に、第2回を11月にそれぞれ1週間、日本エッチング研究所の西田武雄を招いて開催した。在学中の河野もその講習会に参加し、その時制作された作品は西田主宰の研究所機関誌の『エッチング』第12号(1933.10)に掲載されている。【文献】『エッチング』12・14(加治)

河野定男(こうの・さだお)

1933年8月に大分県師範学校において開催された平塚運一講師による第2回版画講習会を機に、武藤完一は版画誌『彫りと摺り』(1931~1933)を『九州版画』(1933~1941)と改題する。その第1号(1933.9)は講習会記念号であり、河野の木版画《橋》が掲載されていることから、河野もこの版画講習会に参加したと考えられる。後日、平塚は講習会の思い出と共に作品の感想を武藤に送り、河野の作品については「思いつきも構図も悪くないが、色が皆浮いてみて落着きがない。もう少し渋く使った方がよかつたと思ふ」と評している。その後、第2号(1934.1)に《犬三匹》を、第3号(1934.4)には《残雪》を発表。【文献】『九州版画』1 / 『創作版画誌の系譜』(加治)

河野次郎(こうの・じろう) 1856~1934

明治初期の愛知、長野師範学校美術教師、銅版画家、洋画家、写真家。雅号は華江、あるいは中華。1856(安政3)年11月11日江戸神田小川町の足利戸田藩邸神田上屋敷に、足利戸田藩士杉本奥太郎安志の三男として生まれる。絵画修業歴は当初、江戸で浮世絵を北尾某に学び、幕府瓦解により足利に帰藩し、田崎草雲に南画を学ぶ。1874(明治7)年に上京し高橋由一に洋画を学ぶとする。1876年、愛知県師範学校の画学教員として赴任。1877年8月に『画学階梯』初編を編集し自ら銅版で製作した。翌年第2編、第3編と編集・製作。1879年名古屋創業の石版業「石版舎」で版下絵を描いてもいたという(『古今中京画談』)。1882年に長野県師範学校松本支校、1886年長野へ師範学校移転と共に移る。1889年妻と共にハリストス正教の洗礼を受けた。1896年長野師範学校を退職。長野市南郷町に「河野写真館」を開業。息子が画家で挿絵でも知られる河野通勢で、1927年上京し通勢の家族と生活を共にする。晩年は水彩画、油彩画に取り組む。1934(昭和9)年4月18日逝去、77歳。銅版制作としては『画学階梯』の他に、1882年木曾福島「奇応丸」デザイン、1886年2月「信濃国善光寺図」(出版人・岩岡今朝松)などが知られる。【文献】『河野次郎と明治・大正の画人ネットワーク』(栃木県立美術館・足利市立美術館 2014)(岩切)

幸野椋嶺(こうの・ばいれい) 1844~1895

明治の京都画壇の代表的日本画家。円山・四條派の伝統を作风に統合し、日本画近代化への基礎を築いた。1893年に帝室技芸員となる。1844(弘化元)年3月3日京都市下京区新町四条下ルに生まれる。名は直豊、字は思順。本名幸野角三郎。1852年円山派中島来章に師事し「椋嶺」の雅号を受ける。28歳の1871(明治4)年に、許可を得て四條派の塩川文麟に師事。1878年画学校設立建議書を京都府知事に提出。1880年に京都府立画学校創

立し、鈴木百年と北宗(狩野・雪舟派)教員となるとともに私塾を開く。各地の内国勸業博覧会の審査員。1892年1月農商務省からシカゴ万国博出品品の委嘱を受け(傑作とされる)《秋日田家図》制作。芸艸堂から出版の彩色摺画譜に『工業図式』『百鳥画譜』『椋嶺画譜』『花鳥画譜』『亥中の月』『草花百種』『千種の花』などが知られる。他に花鳥画版画の出版がある1895(明治28)年2月2日逝去。諡号は「秀香院誠信椋嶺居士」。墓は京都市上京区寺之内通大宮東入ル妙蓮寺町の本門法華宗大本山妙蓮寺にある。【文献】『幸野椋嶺とその高弟展(菊池芳文・竹内栖鳳・都路華香・谷口香嶠・上村松園)』図録(京都府立総合資料館 1975)(岩切)

河野通勢(こうの・みちせい/つうせい) 1895~1950

1895(明治28)年6月10日群馬県伊勢崎に生まれる。父次郎は師範学校美術教師・銅版画制作者。少年期は長野市に過ごし、絵画制作(油彩・水彩等)、銅版画制作などは当初、父の薫陶による。自ら裾花川河岸を美術道場に設定し、独学に努める。1914年19歳で第1回二科展3点入選。1915年関根正二の訪問を受け刺激を与える。1917年第11回文展で《自画像》が入選し注目される。1918年草土社(エッチング作品も発表)に加わり、同人となり岸田劉生との親交を深める。1920年9月「聖書挿画展覧会」(油彩・素描・墨筆挿画など)を神田・流逸荘で開催。1921年以降は書籍装幀にも熱心に取り組み独特の表現や様式で制作。1923年5月第1回春陽会出品、9月の関東大震災に際しスケッチとエッチング作品を多数制作。1924年3月の春陽会展出品のエッチングなどで春陽会賞受賞。7月から『報知新聞』連載小説の白井喬二「富士に立つ影」の挿絵を川端龍子、木村莊八、山本鼎と交代で描いた。以後、挿絵画家として新聞、雑誌で終生活躍。1927年11月大調和会に参加、12月に九如会結成。1928年国画会結成に参加。同年主情派美術協会結成(岩田専太郎・山名文夫ら)に参加。1929年洋風版画会設立に参加。1931年日本版画協会創立に参加。版画はエッチング、石版、木版の作品がある。1941年小室翠雲主宰の大東南宗院会員。1950(昭和25)年3月31日逝去。父親譲りの幕末以来の銅版画制作方法に、バーナード・リーチから学んだエッチング法を加味してエッチングを制作。石版は1924年春に自宅に石版印刷機を置き制作。木版画は伝統木版画方式で多くは親戚にあたる版画家野村俊彦が担当した。【文献】『大正の鬼才 河野通勢 新発見作品を中心に』図録(美術館連絡協議会 2008)(岩切)

鴻の巣山人(こうのす・さんじん)

1922(大正11)年6月1日から7日まで東京日本橋の白木屋呉服店で開催された渡辺版画店主催の第2回新作版画展覧会に、伊東深水、川瀬巴水、エリザベス・キースらとともに、「鴻の巣山人(奥田氏)」名で木版画《ダリア》《柘榴と葡萄》の2点を出品する。また年代は不明だが、5月17・18両日に岡崎町市公会堂「ママ」東館楼上に於いて「鴻巣山人絵画小品展覧会」が開催され、与謝野鉄幹・晶子、北原白秋、吉井勇の4人の歌贊入りの〔日本画〕50点を出品。発起人は内貴清兵衛、榊原紫峰、中村弥左衛門、田中傳三郎、池田清七の5名。「鴻巣山人絵画小品会に就いて」(目録)には、「吾等友達に、東京にて仏蘭西料理を渡世とする男あり鴻巣山人と云ふ。絵を描く事を好み、素人のくせに、事の外美事なる作をのしますれば、人々ひそかに驚きけるこそ面白けれ。其画風は、

くろうとのやうに巧みならざれども頗る呑気に出来上り、見る人をして其純真さに、うつとりとさせられる妙味あり。(中略) 此の隠れたる天才の作品を友達間に於てのみ賞玩するにしのびず、世の識者、趣味家、諸君に発表して偕に一日の清遊を試みんと、発起人一同興味を以て開催致します」と紹介されている。

なお、鴻の巣山人については、渡辺木版画美術画舗店主の渡辺章一郎氏より以下のご教示を頂きました。「鴻乃巣山人、本名は奥田駒藏。大正期、京橋でレストラン鴻乃巣を経営する。住所は京橋区南伝馬町2-12。当時、京橋五郎兵衛町にあった渡辺木版画舗とは近隣の関係で、渡辺庄三郎氏と親交があり、上記2点〔《ダリア》《柘榴と葡萄》〕の木版画は奥田氏の注文制作だったと考えられる。大正末から昭和初期ころに逝去されたようだ。【文献】『美術月報』3-10(美術月報社 1922.7) (樋口)

合原四郎(ごうはら・しろう)

洋画家宇治山哲平が昭和初期に出身地大分県日田町(現・日田市)で版画誌『朴ノ木』を発行する。その第1号(1933.4)に《風景 A》、第2号(1933.7)に《白い村道》を発表。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002.9) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

耕峰・耕峯(こうほう) → 庄田耕峰(しょうだ・こうほう)

郡山三郎(こおりやま・さぶろう) 1908 ~ 1982

1908(明治41)年鹿児島県に生まれる。鹿児島県[第一]師範学校を経て、帝国美術学校(現・武蔵野美術大学)西洋画科を卒業。1947年中央美術学園を創立し、この年から絵画通信教育機関を発足させ、1951年からは通学部の学生も募集。1955年には東京都より各種学校として認可され、中央美術学園長として学校を運営する一方、雑誌『中美』(1982年に休刊)を創刊し、編集発行に携わる。その間、1952年には美術公募団体の中央美術協会(初代会長は児島善三郎)を発足させ、第1回中央美術協会展を開催、現在に至っている。著書に『芸術家のことば』(河出書房 1957)などがある。1982(昭和57)年逝去。版画関係では東京吉祥寺の「朴の会」が発行した版画集『むさしの風景』其の1(1938.11)に《善福寺風景》を発表する。同誌には文学や芸術関係者が多く参加している。【文献】郡山三郎『芸術家のことば』(河出書房 1957) / 『むさしの風景』1 / 「郡山三郎」(無題ドキュメント インターネット検索) (加治)

古賀春江(こが・はるえ) 1895 ~ 1933

1895(明治28)年6月18日福岡県久留米市、浄土宗寺院・善福寺の長男として生まれる。本名・亀雄(よしお)。1912年上京し、太平洋画会研究所に入り、翌1913年日本水彩画会研究所に入った。またこの年郷里で創立された「来目洋画会」に参加。この年より詩を多数制作。1915年僧籍に入り良昌(りょうしょう)と改名、春江(はるえ)を呼び名とした。1916年日本水彩画会会員。1917年二科展に初入選する。1918年頃から油彩画の制作を始める。1922年二科第9回展で二科賞を受賞、またこの年二科展出品の若手新傾向の作家たちと新興美術のグループ「アクション」を結成した。1926年6月に1930年協会より勧誘を受けて加盟するが9月に退会。1930年親交のあった中川紀元より東郷青児を、また東郷

の紹介で阿部金剛を知る。さらに新しい思想に関心を寄せ、前衛詩論、社会科学の文献を渉猟した。1929年二科第16回展に代表作となる《海》ほか、シュールレアリスムへの関心を示すモダニズム絵画を出品。1930年より装幀や挿絵の仕事に追われるようになる。予てより病気がちであったが、1932年に強度の神経痛に襲われて身体が衰え、しだいに人嫌いになり、小鳥を熱愛するようになった。翌1933(昭和8)年、病気がちの状態で作成と発表をつづけたが、9月10日東京で逝去。自ら版画を制作した形跡はなく、1933年12月19日に営まれた古賀百箇日法要の返礼として配られた木版画《梅》(日本水彩画会第11回展[1924]出品の同題名の水彩画の複製版画)が残る程度である。そのほか、1930年開催の日本水彩画会第17回展の木版画によるポスターが残る。水彩と鉛筆で制作したこのポスターの原画が東京国立近代美術館に収蔵されている。【文献】『古賀春江の全貌展カタログ』(石橋財団石橋美術館、神奈川県立近代美術館 2010) (滝沢)

古川義光(こがわ・よしみつ)

1935年5月、台湾文化の向上を目的に立石鉄臣、宮田弥太郎、西川満らが設立した『創作版画会』の創立会員に名を連ねる。作品は未見。【文献】西山純子「華麗島の創作版画—一九三〇年代・台湾—」『千葉市美術館研究紀要 採蓮』7(2004.3) (樋口)

小坂徳三郎(こさか・とくさぶろう)

長野県下水内郡の小学校教師の集りであった下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第2号(1935)に《日の出》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

小坂義龍(こさか・よしたつ) 1912 ~ 没年不詳

1912(大正元)年に生まれる。1930年に静岡中学を卒業。同級生栗山茂が卒業記念に発行した版画誌『艸笛』第1号(1930.3)に童謡、第2号(1930.8)に詩を寄稿する。卒業後は版画を制作し、第3回童土社創作版画展(1931.6.7 ~ 9 静岡市・田中屋画廊)に《風景》2点と《だりや》を出品。第4回童土社創作版画展(1932.5.7 ~ 9 静岡市・すみや楼上)からは同人となり、《一つ橋より》《安倍川土手より》を出品する。また童土社発行の版画誌『ゆかり』第3号(1931.5)に《はこべ》を、第4号(1931.8)に《だりや》と小文「鰻の眼鏡の僕」、第5・6号(1931.12)に《風景》、第7号(1932.3)に《風景》、第8号(1932.5)に《一つ橋より》を発表。東京の料治熊太が発行した版画誌『白と黒』第23号(1932.4)にも《阿部川土手》を発表する。1931年父親の事業失敗のために、一家で東京に移り、染物屋に奉公するが、戦後の消息は不明。【文献】『静岡の創作版画 昭和戦前・版画家たちの青春』(静岡県立美術館 1991) / 『創作版画誌の系譜』(加治)